

遂に之を其の政治上に利用し、或は強力なる軍備の下に有利なる外國貿易上の發展を企てるので之れを資本主義的帝國主義と云ふのである。

資本は斯くの如く重要なものであるが、其の中には前述の如く固定資本と流通資本の二種のものがある。此の兩者は互に適當に配合せられて、其の間に能く調和を保つて居らねばならぬ。而して其の配合の割合は國の經濟事情を異にするに従つて一様ではない。今農業國と工業國とを比較するに、固定資本の割合は工業國に多く、農業國に少ない。尙ほ一般に固定資本は、其の國の經濟事情の進歩と共に割合が益々増加する傾向がある。併しながら徒らに固定資本を増加するは危険で急激に固定資本を増加する結果は、動もすれば經濟界の混亂を醸すこととなる虞がある。

#### 第四節 資本の成立及其の要件

さて、資本は生産に必要な要素である。經濟の進歩、發達を圖るには其の資本の増加を計らねばならぬ。さて資本の増加を計るには、先づ資本が如何にして成立するものであるかといふことを知らなければならぬ。抑も資本とは、過去の生産の結果を節約したるものである。然るに、資本の成立には、學者間に種々なる議論がある。即ち或る學者は資本の成立に就いて生産に重きを置き、或る學者

は勞働に重きを置き、また或る學者は節約制欲に重きを置いてゐる。併し既に生産と言ふ以上勿論其の中には勞働を含んで居る。次に制欲と言ふのは、少しく語弊がある。其の故如何となれば、社會の中産階級以下の者は、欲を制して過去の生産の結果を悉く消費せず、更らに後の生産に使用するが爲めに其の一部を残して置くから、成程此の場合には制欲と言ひ得られるが、社會の有産階級、若しくは金満家は、直ちに其の生産したものを消費し盡して了はないからと云つて、それで大に欲を制したものであると云ふことが出来やうか。蓋し十分理屈に合つた話であるとは云ひ難いからである。素より資本は前述の如く過去の生産の結果を節約して残したものであるから、其の成立には二個の要素がなくしてはならぬ。即ち一は生産他の一は節約である。然るに之を一の要素より成立つものとして、勞働にのみ重きを置き、若しくは制欲にのみ重きを置くといふ風に説明するのは、穩當でない。資本の成立には、斯く二個の要素を必要とするのであるから、其の増加を圖るには、所得を増やすことと貯蓄を旺んにすることを努めねばならぬのである。而して貯蓄を旺んにするには人々が貯蓄心に富んで居らねばならぬのであるが、貯蓄心の厚薄若しくは大小は、左の條件の如何に依つて決せられるのである。

一 利子の高低 普通の場合には、利子の低いよりも高い方が貯蓄心を厚からしめるものである。

例へば、假りに百圓の金を貯蓄するとして、銀行に預けて年三分即ち三圓の利子を得るものとすれば、三圓位では詰らぬといふやうな考を起す人もあらう。併し利率が高く、利子が五圓若くは六圓であるとすれば、前に貯蓄に冷淡であつた人も、それだけの利子が取れるなら、自分も貯蓄を爲ようといふことにならう。併しながら子孫の爲に貯蓄をする場合の如き、例へば、茲に或る人があつて、子孫の爲めに年々千圓の収入が得られるやうに貯蓄をして置いて遺るとすれば、若し年利が一分であるとするると、一萬圓だけ貯蓄して置いて遺れば、其の子孫は年々千圓の収入がある筈であるのに、若し年利が五分であるならば、其の人は前の倍額即ち二萬圓を貯蓄して置いて遺らねばならぬこととなる。即ち此の場合は、利子が低ければ低いほど貯蓄を多くすることになるのである。但しこれは寧ろ少ない場合で、一般には利子が高いほど貯蓄心を厚くするものである。

二 貯蓄機關の完否 貯蓄した所ものを保管し、並に之に利子を附する所の貯蓄機關の完備して居ると否とは、貯蓄心に大なる影響を及ぼすものである。それ故諸種の金融機關殊に貯蓄銀行及び郵便貯金、信用組合、信託會社等の如き各機關の働きを完からしめることは、資本を増加する上に甚だ緊要である。

三 各人の利己心並に他愛心の如何 利己心の厚薄は、貯蓄心と極めて大なる關係を有するもので

ある。それと同時に他愛心や愛國心も亦大なる關係を有するものである。即ち前段利子の高低に就いて述べたやうに、人は子孫の爲めに貯蓄をする者であるが、是れ全く他愛心から出るのである。尙ほ慈善事業若しくは教育事業を盛んならしめんとするも、又、戦争の目的遂行の爲め悪性インフレーションの發生を阻止せんとするも、他愛心より出るので、これが動機となつて、大いに貯蓄を旺んにすることがある。

右三種の條件の外、國民の氣質、習慣、嗜好、職業、身體、財産の安固なるや否や、並に氣候の如何なども皆な貯蓄心の厚薄を支配する條件である。

### 第五節 機械

最後に機械は資本の中でも一般經濟上特に重要なものである。さて機械は、初め之を動かすときには素より人力を要するが、器具の如く初より終まで人力を假るものではなく、後は水力、電力、又は蒸氣力等によりて自由に運轉するのである。それで、機械は之を大別して動力機械及び作業機械の二種となし、動力機械とは蒸氣力、電氣力等の動力を起すに用ゐる所のもの、作業機械とは動力機械を以て起した動力によりて實際の仕事をするに用ゐる所のものである。

機械の効用は人も知る如く頗る大なるものである。機械は一般に強い力を有して居つて、之に動力さへ與へて置けば、何時までも間斷なく運轉して弱はることがなく、その動作は極めて迅速である上に、始終均一であるから、精密を必要とする仕事をするのに適して居るのである。又た機械はか弱き婦人や小兒にも取扱ふことが出来るから、機械を使用すれば、生産物の品質を優良にし、人力を省いて生産物の數量を増加せしめ、従つて物價を低落せしめることになるのである。尙ほ單に人力を以てしては、何時になつて完成するか見定めのかね様な大事業でも、機械を使用すれば容易に完成することが出来るのである。十九世紀以後に於ける産業界の革命は、實に機械の効用が主要の原因をなして居るのである。又た英國が世界の強國として認められ、隆盛を致したのも、全く機械の賜であつて、殊に紡績業の異常なる發達を來したことは、最も適切に機械の賜の大なることを物語つて居るのである。従つて英國今日の富強は、ワットやアークライトに負ふ所が甚大であると云ふべきである。併しながら一利一害は數の免かれぬ所であつて、機械にもまた種々なる弊害があるのである。即ち機械が出来て職工が職を失ふは屢々見る所であり、又た機械が發明された爲めに、熟練な労働者が職を奪はれることも、屢々見る所である。尙ほ機械の使用が旺んになつて、その發明改良が相次ぐといふ風になれば、新機械の行はれると共に、舊式の機械は廢物となつて、其の所有者は大なる損失を蒙ること

もあるし、更に婦人小兒でも取扱ふことの出来る所からして、自然、婦人や小兒までが工場に赴いて仕事をするに成り爲に家庭の和樂を妨げる一方には、風紀上、衛生上大なる弊害を醸すことになるのである。最後に機械を使用して工業を營むことになれば勢ひ大資本を要し、小資本家は之に指を染めることが出来なくなり、爲めに大資本家のみ跋扈し、小資本家は其の壓倒する所となつて、貧富の懸隔を甚だしからしめる結果を生じ、彼の労働問題、社會問題などの起る原因をなすのである。

且つ茲に少しく注意して置かうと思ふのは、機械は労働者の職を奪ふといふことである。この事は、一時經濟學上盛んに議論の花を咲かしたものである。併し機械が労働者の職を奪ふと云ふのは、單に一時の現象であつて、深く憂ふるには足らぬ。成程機械の使用は、労働者の職を奪ふけれども、一方には機械使用の結果として生産が旺んになり、その爲め勞力の需要を増し、前に職を奪はれた労働者は、その需要増加に乗じて新たに職を求むることが出来るのである。例へば、電車が出来れば、人力車夫の如きは多大の打撃を蒙るに相違ないが、又た車掌、運轉手と云ふやうな新らしき働き口が澤山出来るのである。又た鐵道が敷設せられると、一時労働者の職を奪ふけれども、一方には驛夫、運搬夫の需要が多くなるのである。尙ほ又た機械が如何に精密な仕事をするに云つても、その製造する品物は千篇一律で、個人の趣味的欲望を十分に充たさしめることは出来ないから、各個人銘々の需要を

適切に充たすのには、是非とも人力に待たなくてはならぬ。之れ今日に於て機械は漸次人の勞力の中で單純な種類ものを奪ひ、そして人の勞力は精巧なる美術的製品の生産に向つて移る傾向がある所以である。蓋し千篇一律のものを製作するは機械の特長であるが、變化百出の精巧品は人力に待たねばならぬからである。彼の西洋諸國に於ても、手工(Handwork)に依る品物は非常に高値であるのであるが、この種の品物は各個人への趣味に應じて製作するのであつて、機械を以て製作することは出来ないからである。

何は兎もあれ、機械の使用が今後益々旺んに成り行くことは疑を容れない所である。唯だ併し機械を使用するには斯う云ふ條件を必要とするのである。即ち仕事の單純なこと、販路の廣いこと、資本の十分なこと、賃銀の高いこと、この四條件である。是れは前述の如く、複雑な仕事は機械では十分に出来ないし、販路の狭いものにも拘らず、機械を使用して盛んに生産をすれば、生産過多に陥るし、資本が十分でなければ高い機械を買ふことが出来ないし、賃銀が安ければ機械に依るよりも勞力に依る方が利益が多いからである。それで今日西洋諸國では既に機械を以て生産して居るものを、我國ではまた機械を使用せずに全く人の勞力に依つて生産して居るものがあるのは、賃銀が高くないからである。現に大連埠頭には船より荷物を引上げるのにクレーンあれども之れを使用せず、久しくクレー

ーと云ふ支那人夫を使ふて居た。其の數幾千人との事であつた。之れクレーンと云ふ人夫の賃銀は實に安かつたからである。

## 第四編 交換

### 第一章 交換の意義

#### 第一節 交換の意義及起原

交換とは、其の生産したところの經濟財を互に交易するを云ふのである。それで、今日でも極く片田舎の村落などに行くと、往々にして自ら生産し自ら消費すると云ふ極めて幼稚な自給自足の社會もあるのであるが、併しそれでも尙ほ其の必要とする財全部を自ら生産するのではなく、其の一部は交換に依つて獲得するのである。されば今日に於ては必要とする財を悉く自ら生産して、初めより終まで一切交換を行はないといふ社會は、絶對にないと云うて可なりである。

交換の行はるゝ社會は、人が互に異種の財を生産するといふことが條件になつて居る。それで、若

し總べての人々が同種の財を生産するのであつたならば、自分の持つて居るものは、他人も持つて居るのであるから、交換の起る道理がない。それ故極めて原始的の社會で共通の自然條件が存して居る處では、交換は起らなかつたのである。素より「原始的社會でも、或る者は漁をするし、或る者は獵をするから、交換は行はれて居つた」と考へるものがないが、原始的社會の人間は、個々別々に孤立して生活したのではなく、互に團體を作つて共同生活を營んで居つて、其の團體の間では、生産物が同じであつたから、交換は起らなかつたのである。従つて交換の起るに至つたのは種族が遊牧をして他の種族と接觸するに至つてからで、種族と種族との間では、其生産物が同じでなかつたから、茲に交換が起つて來たのである。併し初めの中は交換といつても決して平和的のものではなく、所謂奪掠を行つたのであつて、奪掠に依つて自己の有せざるものを他より得たのである。で奪掠をすれば、他よりも、亦襲撃され奪掠される恐れがあるから、奪掠が變じて贈與となり、自己の有して居つて他の有して居らぬものを他に贈與すれば自己の有せざるものを他より又た贈與して來ることになり、かくして交換を行つたのである。處がそれが更に進歩して遂に今日行はれて居るやうな平和的交換が漸次行はるゝこととなつたのである。斯く交換は種族の接觸に其の端を開いたのであるが、種族の中に在つて或る種族は専ら交換を掌り、種々なる種族の間に交換の媒介をしたから、かやうなものが商業の濫觴を爲し、また商人の嚆矢となつたのである。それゆへ昔時に在つては、商人は多くの場合外國人であつたのである。

現在、吾々が消費する所のものは、吾々自身が生産したものは殆んど皆無であつて、殊に或る貨物の如きは、遙かに海外より來るものであるから、吾々は總べて間接の方法即ち交換に依つて各自の欲望を充たして居るのである。また今日の生産は、生産物を賣るといふことを主として居つて、人々の需要するものは、相當の價格が拂はれるから生産せられ、需要の無いものは、價格が安いから生産せられないことになり、誰も如何なる物を生産せよ如何なる勞働に従事せよと他より命ぜられると云ふ次第ではなく、唯だ需要供給の法則の支配を受けて、其の向ふ所、爲すべき所を選ぶのが主である。さうしてそれには、二つの假定が考へられるからである。即ち其の一は、各人にはそれ／＼利己心があるから、報酬を得る目的で必ず多くの人々の需要するものを生産するであらうと云ふこと。他の一は假令個人が粗末なものを生産して高い價格で賣らうとしても、競争があつて之を防止し、結局は相當の報酬を得て満足しなければならぬことになるであらうと云ふことである。乍併これは素より假定で而も自由主義的な假定であるから、如何なる場合に於いても、此の假定通り行くとはいへぬのである。即ち或る時は、社會の餘り需用しない不必要な、また好ましくないものを生産することもある。

し、又た或る時は、生産者に於て自から消費するのでないから、實際社會の需要する量を確知することが出来ないで、見込を以て投機的に生産することもあるのである。かやうな場合には交換も其の範圍を制限する必要を生ずるのである。

要するに財は之を生産しても生産した場所で直ぐ消費されない限り、之を以て需要を充たすが爲めには消費者の處まで運ばなければならぬので、生産地より消費地まで貨物を送る地理上貨物の移轉と云ふことをしなければならぬのである。次に又た他人の生産したものを消費する場合には、その所有權の移轉と云ふこともしなければならぬのである。此の場處的並に法律的移轉が財貨の交換で、交換には人の交通、通信といふ事を伴ふも、財貨の交換の中では右の條件が最も重要な部分を占めるのである。又た財貨の交換の外に、此の交通通信をも加へて此等を總括して言ふときはそれは、廣義の交換と云ふことになるのである。尙ほ此の財貨の交換には、**第一欲望の満足の外に、第二財貨の分配と云ふことも含んで居るのである。**

## 第二節 交換の妨害

最後に交換の妨害をなすものに就て述べると、之を分つて三とする。其の**第一は經濟的妨害**である。

即ち一般社會が貧乏であつて購買力に乏しければ交換は妨害を受けるのである。また生産が需要以上に超過すると、これまた交換の妨害をなすのである。その他巨額の國債が一般市場に於て募集せられて貨幣が市場より吸収せられたときとか、戦争其の他の事變若くは恐慌の場合に人々が貨幣を所持することを欲して貨物を要求しないときとかにも、交換は均しく妨害を受けるのである。それから**第二は技術的妨害**であつて、是れは或る貨物が其の性質上運搬することの出来ぬ場合とか、また交通機關が不備であつて、生産地より消費地までの貨物の運搬が困難である場合とかの如きである。それから、**第三は法律的妨害**であつて、契約の手續が非常に面倒であるとか、住居移轉の自由が甚しく束縛せられて居るとか、貨物の輸出入が禁止せられて居るとか云ふが如き場合である。

## 第二章 交換の機關

交換の機關とは、交換を容易ならしむる技術上の設備であつて、これには幾多の種類があるから、左に之を列叙する。

## 第一節 交通機關

財貨の交換をするのには、其の財貨を生産地より消費地に運搬する必要があるのみならず、また之に伴うて人を運搬し、並びに人の意思を傳達する必要がある。それで、郵便、電信、電話等の如き人の意志を傳達する機關は之を通信機關と稱し、物及び人を運搬する機關は之を運輸機關と云ふのであつて、交通機關とは右の兩者を總稱して言ふ語である。そして又運輸機關は更に分つて二種となしその一は陸上に在る道路、橋梁、鐵道、電車の如きもので之を陸運機關と稱し、他の一は船舶、運河、港灣等の如きもので之を海運機關と云ふのである。

さて交通機關の國民經濟に及ぼす影響は、極めて大なるものがある。例へば中世紀の頃、歐洲大陸

には、まだ完全な道路がなかつたから、當時の交通は全く地方的で主として都市附近に限られて居つたのである。即ち當時は所謂都市經濟の時代であつて、少し遠方に經濟財を送らんとしても、牛馬若しくは、人の運び得るもので而も、容積の割合に價格の大なるものを選ばなければならなかつた有様であつた。但し、或る程度までは、河川若しくは海洋に依る交通は陸上よりも容易であつたから、大陸の内部に於ては、かく交通が地方的であつたにも拘らず、沿海地方に於ては、既に多少隔絶して居る地方とも交通をして居つたのである。それで、十六七世紀の頃道路や運河の作らるゝに及んで、交通は頼みに發達して、經濟も此の時から漸次國民經濟になりかゝつたのである。而して十九世紀になつてからは、鐵道も出来るし、汽船も出来るし、交通の状態は全く一變して、今や經濟は既に國民經濟の域より、國際經濟に進んだのである。

次に交通機關の經營に就いて、少しく述べて置かう。交通機關は、これを國家に於て經營すべきか將た又、私人の經營に委ねべきか。是れは素より重大の問題であるが、現今各國が實際探つて居るところの政策を見ると、道路、橋梁、港灣、郵便、電信、及び電話の如きものは、多く國有若しくは公有になつて居るのである。それで、我邦でも終に歐洲諸國の例に倣ひ、鐵道を國有にしたのである。處で、交通機關を國有にする理由は如何であるかと言ふと、交通機關は獨占の事業であるから、これ



を私人の經營に委ねると、經營者が動もすれば暴利を貪るに至る虞があるからである。而してこれは經濟上の理由であるが、次には財政上の理由があつて、交通機關の經營に依つて國庫の歳入を増加せしめんとするのである。尙ほ軍事政治上並びに技術上の理由もあるが、要するに、交通機關を國有にすべきか或は私有にすべきかは、簡單に決することの出来ない困難な問題である。殊に鐵道に於ては、然りである。單に机上の議論のみを以てしては、到底決し得る問題ではない。唯だ原則として、獨占事業は公有にするがよいと言ふのである。そして實際の趨勢も、亦たさうなつて居るのである。

### 第二節 度量衡

交換をするには、貨物を測る必要がある。即ち交換をなすにさきだちて、吾々は物の長短、大小、輕重を知らなければならぬのである。此の必要に應ずるものが、即ち度量衡である。度量衡に最も尊むべきことは、其の均一と正確とである。乍併度量衡の沿革を見ると、遠き往昔の度量衡は甚だ不均一不正確なものであつた。例へば、往昔に在つて距離を測るには、人の身體の或る部分を以てしたのである。現に今日に於て獨逸語のフス(Fuss)若しくはマイル(Mile)の如き名稱のあるのは、是れが爲めである。又た重量は穀物を標準とし(Grain)なる語の存する所以)、面積はモルガン(Morgan)

の如き農業上の勞働を標準としたのである。従つて其の不正確なること、想ふべしである。而して又た此の標準が地方に依つて區々であつたのであるから、其の不均一も甚しかつたのである。併しこれも交通の區域が狭く、或る都市若くは或る地方のみに行はれて居る間は、忍ぶことも出来たのであるが、交通が漸次發達して其の區域の廣まるに連れ、其の不均一、不正確は最早忍ばれなくなつて來たから、茲に度量衡の統一が計られ、遂に其の統一が國內に止まらずして進んで國際間に及ぼさるることとなつたのである。そこで千八百七十五年メートル制の國際聯合といふものが出来、爾後今日に至つてメートル制は殆んど世界各國の間に行はるる有様である。我邦でも、明治十五年に此の聯合に加盟したのである。蓋し十進一位のメートル制は、最も便利且合理的なものであるからである。

### 第三節 商 業

商業とは、利益を得て再び賣る目的で貨物を買ふことを業とするのを云ふのである。それゆゑ自己が消費する爲めに物を買ひ、又た加工するが爲めに粗製品を買ひ、若しくは自己の生産物を賣るが如き事は、商業ではないのである。従つて又た斯かる事をして、其の人は商人ではないのである。さて商業の成立するには、二箇の條件を必要とするのである。即ち一は私有財産制度の認められて居る

社會たること、他の一は分業の行はれて居る個人的組織の經濟社會たること之れである。それゆゑ社會主義や共產主義の行はるる社會には社會自らが單位となりて外國と商業取引をなす外、内國の商業は成立せぬのである。さういふ社會では、恰かも造兵廠の倉庫に貯藏してある武器を兵士に配給してやるやうに、貨物の大貯藏所を置いて、其處より各人に貨物を配給してやるのであらう。斯かる場合には、何等商業の存在しやう筈がないのである。貨物の配給はしてやつても、それは素より商業ではないのである。

商人なるものは、出来るだけ多くの利益を得んとして値段の安い所及び時に貨物を仕入れ、其の不足して値段の高い所及び時に賣らうとするから、其の結果貨物の過不足を平均することになるのである。又た商業は、生産者及び消費者の双方を利せしめる働をなすものである。何となれば、若し商人のないときには、生産者は貨物を賣らんとして消費者を、消費者は貨物を買はんとして生産者を、それ〴〵互に搜し當てねばならぬから、其の煩や想ふべしであるのに、商人なるものあつて生産者、消費者の中間に立ち交換の媒介をなせば、生産者は座して其の賣らんと欲する所のを賣り、消費者は座して其の買はんと欲する所のを買ふことが出来るからである。然るに若し商人にして、生産者には生産物の販路を知らしめず、消費者には生産物を求むべき處を知らしめずして、己れ媒介者たる地位を利用し其の間に暴利を貪らんとすれば、これ實に商業の濫用である。

商業は第一にその取扱ふ品物によりて物品商、有價證券商及び不動産商の三種に區別することが出来る。それから第二には貨物を賣る人に依つて卸賣商及び小賣商の二種に區別することが出来るのである。此の小賣商は直接消費者に貨物を賣るものであるが、卸賣商は生産者から買入れた貨物を小賣商に賣渡すものである。處で小賣は其の設備が概して小規模であつて行商、露店、古着商の如きは殊に然りである。併し近來小賣にも資本主義が浸透して大計畫のものが漸次増加する傾向があつて、彼のデパートメント・ストアの例に徴しても此の傾向を知る事が出来るのである。又た小賣商は生産者の生産した貨物を卸賣商より買取り之を消費者の方へ賣るのが普通であるが、併し各所に散在して居る生産者から貨物を買取り、之を卸賣商に賣渡すものもあるのである。但し我邦では、之を小買商と云はないで買次と稱して居るのである。第三に地理上より區別すると内國商、外國商となるのである。而して外國商は更に分つて通過貿易商と輸出入商とに分れることが出来るのである。又た外國貿易には斯ういふ見方もあるのである。即ち一は受動他は能動である。例へば日本の外國貿易に就いて言へば、日本人自ら營むときは之を直輸出又は直輸入と言ひ能動の外國貿易と云ふの類である。第四に商人の日本人自ら營むときは之を直輸出又は直輸入と言ひ能動の外國貿易と云ふの類である。第四に商人の

位置より區別すると座商及び行商の二種となるのである。詳言すると、交通機關の不備であつた時代には、行商の方が主に行はれて、彼の隊商(Caravan)と稱するものゝ如きは行商の適例であつたのである。即ち當時は文化が未だ開けずして盜賊が山野に出没して居つたから、金品を携帯して旅行するは甚だ危険のことであつたところからして、行商は相連れ立つて旅行をしたのである。即ち隊商とは、多數の同伴者を有するところの行商の團體である。然るに交通機關の發達するに及んで、此の行商は漸次座商に變はることになつたのである。我邦でも彼の近江商人と言へば、近江聖人と相並んで有名なもので、今日でも東京、大阪、京都を初じめ、般販な都市に「近江屋」なる暖簾を掲げて居る店舗が甚だ多いのは、皆な近江商人に依つて開業せられたものである。即ち近江商人は、行商時代に於ては我國の旅行は比較的安全であつたからまだ隊商と稱する程の大團體をなすには至らなかつたが、互に相連れ立つて遠く行商し遍ねく全國に亘つて其の足跡を印したのであるから、行商の座商に變するに及び、關東に行商したものは東京に商店を開き、關西に在つたものは京都、大阪等般販な都市を選んで店舗を開き、それが今日に存して居るのである。それで是れは交通の發達と共に行商が座商に變つた我國の一例であるが、最近に及んでは、行商が舊時の行商の形を變へて再び現はれて來て居るのである。彼の注文を取らんとして諸所に店員を派遣し或は各地に出張店を置き、若しくは時々場所を

變へて競賣を行ふが如きは、即ちそれである。

最後に附加して置かうと思ふのは、仲買業と運送業とである。仲買業とは、需要者と供給者との間に立つて物品又は權利の賣買を媒介して手数料を得るを目的とするのである。運送業とは、運賃又は手数料を受取つて主として貨物の運送を營むものである。即ち交通機關が發達して來ると、一の荷物を或る地點に送らうとするのにも、種々な方面より送ることが出来るのであつて、如何なる道筋を取れば、荷物の到達が最も早く、その運賃が最も低廉であるか、之を知ること困難になるし、又た發送の手續も面倒になつて來るから、茲に運送に關することを專業とする運送業の如き特別な商業が起つて來たのである。

#### 第四節 市場

市場なる語には、廣狹二様の意義がある。其の廣義の方は、或る特定の場處を指すのではなく、漠然と寧ろ抽象的に需要供給の關係を概括して言ふのである。例へば世界市場、地方市場、金融市場と云ふが如きものである。之れに反して狹義の方は、買手と賣手とが相集つて取引をする一定の場所を指すので、座商の發達以來市場は經濟上餘り重要視せられぬことになつたのであるが、併し現今でも

或る種の市場は、依然重要視せられて居るのである。我國に於ては蔬菜市場、魚市場、織物市、酉の市、年の市等の市場がある。青果市、魚市の如きは、都會の近傍若くは遠隔の地方より蔬菜、青果、魚類を都會に運んで來るのを販賣するので、東京の青物市、魚市は毎日開かるゝことになつて居る。但し青物類、魚類は、衛生其他取引上の關係より市を開く場處が普通都會の或る地點に限定せられて居るのである。又た織物市は、桐生、足利、或は八王子、若しくは青梅等に於て、月の二、五或は三、八と云ふが如き日を定め、大抵は一月に六回位開かれるのである。此等の市場は、生産者と卸賣商、或は生産者と小賣商の集まる所で、消費者は與らないのが普通である。又た酉の市は、神社の祭日に開かるゝもので、こゝには特種の生産品が賣らるゝのではなく、唯だ一般消費者がお祭的に寄つて來て、思ひ／＼のものを買取るに過ぎないのである。又た年の市は、正月の必要品を賣るが爲めに年の暮に開かるゝもので、此處には生産者と消費者とが寄つて來るのである。外國でも週市として毎週開かるゝものと、年市若くは大市として年々一回宗教上の祭日に開かるゝものがあるが、獨逸ライプツヒ及びフランクフルトなどのものは見本市として有名である。世界大戦争中及び其の後に於て英國及び佛國に於ては此の獨逸の市を壓倒せんとして見本市なるものを創めた。之れ近代に於て著しく發達したものである。我が國に於ても見本市は既に行はれ、日常必需品を小賣する私の市場は著しく發達

した。其の内、公設市場は營利を主眼とせずして市民の生活問題の解決の一助としたる社會政策上の施設で、著者自ら言ふのは如何かと念へど此の公設市場の創設並に普及の爲めには最初に著者が大に努力したものである。

#### 第五節 取引所

取引所は代替物の取引を目的とする常設の市場で、その取引は、大口である。取引所は普通分つて二種となし、その一は公債證書、會社の株券、社債券等を取引する證券取引所即ち株式取引所で、他の一は米穀、砂糖、生絲、棉花、綿糸、綿布等の物品を取引する商品取引所である。我國では、商品取引所の中では従前米穀取引所が最も重要な地位を占めて居たのであるが、統制經濟の世となつて商品取引所は殆んど凡て其の重要性を失ひ、砂糖取引所の如きは閉鎖し、僅かに生糸取引所のみ自由取引の往時の餘を残して居るに過ぎない。又取引所に於て行はるる取引にも二種あつて、一は實物取引で、他は精算取引である。即ち實物取引は生産者商人などが取引所に於て、仲買人の手を経て賣買し、買ひたる者は賣買の目的物を引取り、賣りたる者は之を引渡す所のものである。元來、取引所の取引は、最初は總べて斯る種類の實物取引のみが行はれて居つたのであるが、其の後、此の種の取引

は比較的其の重要な地位を失ひ取引所取引の大部分は第二種の精算取引となつたのである。即ち精算取引は轉賣、買戻しが許されて、實物を引取り若くは引渡すを主眼とせず相場の変動により其の利を得せんとする差金取引となるのである。従つて其の取引は空取引と言はれ、投機取引であるのである。例へば茲に或る商品が將來下落すると云ふ見込みを付ければ、取引所で其の商品の賣却を契約し、若し又た其の商品が騰貴すると見込を付ければ、其の買入れを契約し、而して期限が來た場合に若し見込み通りに下落若しくは騰貴すれば其の商品を引取り若しくは引渡すかと言へば、實際其の商品を引取るのでもなければ、又た引渡すのでもなく、單に之を他に轉賣若くは買戻をなし其の差金の利益を得ようとするのである。即ち實物を引取り若くは引渡すのでなければ空取引である。又た精算取引には期限があり、株式取引に於てはそれが長期と短期とに分れ、短期は一日なれども長期は一ヶ月毎に當中先とし、總計三ヶ月に延ばし得るのである。別に延取引がある。これは、賣買契約を取結んでから百五十日以内に受渡しをなすもので轉換、買戻を許されず、現物の受渡しをしなければならぬ。精算取引をするのには、賣買契約を爲すに際し、取引の目的物たる商品の價格に比し比較的少額な證據金と云ふものを出さなければならぬ。他は信用に依つて契約を取結ぶので、随つて十分の資金を所有して居らぬものでも、賣買契約を取結ぶことが出来るのである。かやうな次第であるから、取

引所は投機が行はれ易く、實物取引迄も投機化し、悪く言へば一種の賭博場と化して了ふ虞がないでもないのである。

それゆゑ取引所の經濟上に於ける價值如何は取引の種類及び取引者の如何により大に異ならねばならぬのである。若し眞實取引をする意思を有する者が互に取引所に於て賣買をするのであつたならば取引をする者は賣る場合も買ふ場合も一々其の相手を求むるといふ勞を費すの必要なく、之が爲めに時間、手数の節約上より生ずる利便は多大で、且つ此の場合に於いて取引所に現はるゝ所の相場と云ふものは、眞に需要供給の關係を反映するもので、世人は之に依つて直ちに商品に關する一般的需要供給の傾向を知ることが出来るのである、かくてこそ取引所の相場は、眞の公道相場となすことが出来るのである。然るに投機者流が相集つて取引をなすのであつたならば決して斯う云ふ風には行かぬのである。詳言すると、此等の者が相集つて取引をする場合にも、高くなると見込んで買ひ、安くになると見込んで賣るのであつて、其處に一定の相場を作る事は、形式上に於て毫も眞正の取引をする者が取引をして相場を作る場合と異なる所がないのであるが、併し實際に立入つて考へると、兩者の間に大なる相違があるのである。即ち眞正の取引をする商人になると、或る商品を買入れたならば、後で之を一般消費者に賣却しやうと云ふ意思を有するのであるのに、投機者流になると、後で消費者に

賣却しやうと云ふやうな意思は更らにないのである。それで後に至つて、賣却しやうとする者は、取引所の取引に於ては、唯だ容易に所要の貨物を買取ることが出来たといふだけで、此の取引に依つて直ちに利益を得るといふ譯ではない。従つて、彼等が實際に利益を得るの日は之を一般消費者に賣却して後に在るのである。かくて彼等は取引所の取引を以て單に所要の貨物を得る方便となすに過ぎないのであつて、取引は其の折々の市價の自然の趨勢を察して行ふのである。然るに投機者流の後に至つて其の貨物を何うしやうと云ふ意思の無いものになると、唯だ取引所に於ける取引其のものが、直ちに彼等の直接の目的であつて、又た其の利益損失を全く取引所に於ける取引に因つて決してはうとするのであるから、取引所に於て、取引をして居る間の市價の變動は、彼等の目的に至大の關係を有することになる所からして、市價を自然の趨勢に任かせて置かないで、種々の手段を講じて以て自己に有利なる方向に變動せしめんと努めることが殆んど其の常態である。而して其の變動を起さしむる手段としては、時には陰險惡辣のことも、敢へて辭せぬと云ふ場合もあるのである。即ち彼等は市價を唯だ人爲的に製造するのであつて、此の人爲的製造に成る相場が麗々しく日々の取引所の公定相場として現はれるのであるから、斯る相場は名は等しく公定相場であつても、其の一般貨物の需要供給の關係を現はして居らぬのは、言を俟たぬ所である。

元來取引所は、一種の氣象臺の如きものであつて、一國の政治上並びに經濟上の氣象を示すべき筈のものであるのに、投機的差金取引が盛んに行はるゝことになれば、前述の如く人爲的に相場を製造するから、氣象臺の役目をなすべき本來の目的は達することが出来なくなつて了ふのである。是れが即ち投機取引の戒むべき理由である。且つ又た其の餘弊の及ぶ所を考へて見ると取引所で空取引をしても容易に利益を得ることが出来るから常に金錢の取扱ひになれて居る商人一派の者が此の投機に走るばかりでなく、更らに官吏や軍人や醫者、教師の如き商取引などのことには一向に經驗のない人達をも、其の方に誘致するやうになり、果ては一般社會の健全なる勤儉貯蓄の美風を破壊することになる虞がある。これは實に戒むべきことである。

以上は取引所の弊害であるが、併し是れは主として投機取引に於ける缺點を指摘したるものであつて、其の反面には現今の取引所でも、其の利益は素より大なるものがあるのである。即ち今日でも取引所に赴けば、何時でも、所要の賣買が出来、澤山の公債なり社債なりを勝手に賣つたり買つたりすることが出来るのである。而して公債の如きものになれば、流石に政治上並びに經濟上の氣象を反映する所の公定相場を示して居るのであるから、其の利益は決して少なくないのである。更らに例を擧げて此の事を説明すると、茲に人があつて、土地、家屋の如き取引所の取引に上らない財産を所有し

て居つて、都合により之を賣らんとするときには、第一其の價格がどれ程であるか精確に知ることが出来ないし、且つ其の買手を發見することも中々容易でないのである。而も資金の必要を感ずることが急切である場合ならば、相當の買手を求め、相當の條件を以て賣るといふことが出来ずして、所謂「投げ賣り」をして損失を招くの不辛を見ねばならぬのである。處が取引所の取引に上る物を所有して居るのであつたならば、何時にても其の價格の何れ程であるか分り、且つ之を金錢に換へようとするのならば、如何に資金の急需を感じたときでも、之を取引所に於て賣りさへすればよいのであつて、土地家屋の場合と違ひ「投げ賣り」などする必要はなく、時價を以て之を金錢に換へることが出来るのである。これは實に大なる利益である。されば取引所は寔に必要にして且つ有益な機關であるが、併し時には此の有益な機關も、種々なる弊害が伴ふこととなるのである。しかし此等の弊害は必然に如何なる處に於ても取引所に必らず伴うて發生すべきものではないのであるから、取引所の組織さへ改善したならば、此等の弊害を除いて取引所に其の正當なる職分を盡さしむることも、素より不可能ではないのである。

### 第三章 價 格

#### 第一節 價格の意義

經濟學は價值の學なりと言はるるも、價值は主觀的で、價值一般の研究は經濟學よりも哲學に屬し、又經濟現象は價格に關するもので、經濟學は價格を研究すべきものである。されど價格の本質を明らかにする爲めには其の前提として價值を十分知らなければならぬのである。其れ故、本書の總論に於て既に價值を説明した。而して價值の中に交換價值があり、其の價值は客觀的で、それが貨幣を以て表現せられ、それが價格と稱せらるるのである。換言すれば價格は交換價值の貨幣を以て言ひ表はされたものがそれである。交換論に於て研究しなければならぬのは此の價格のことで、而も價格は如何にして定まるやといふ點に重點を置くのである。

#### 第二節 價格の決定と需要供給

經濟に於て最も重要な關係を持つて居るのは價格で、それが如何にして定まるか。と云へば經濟上、種々なる關係によりて定まるといふのは素より當然であるが、しかし價格は經濟以外の種々なる勢力の影響をも受くるものなるを知らなければならぬ。換言すれば、價格には本來經濟上の勢力が働くべきであるけれども、種々その働きに妨害を加ふるものがあるのである。之を譬へて言へば、地球には引力があるに相違ないが、その引力の働きを妨害し、其れよりも強き力を以てすれば、飛行機でも飛行船でも引力に逆行して高く空中に飛揚するが如きものである。かくて價格に於ても、其の決定には經濟上の事情のみによらず、經濟以外の勢力の加はつて、經濟學上の原則の作用を妨害するところもあるのである。其の勢力とは習慣や、他愛心や、誤謬や、欺瞞や若しくは事實上併びに法律上の強制と云ふやうなものが、即ちそれである。而して一の價格の現はるゝには、此等種々なる勢力が相重なつて作用するのである。併し茲には姑く此等非經濟學的原因を除外して置いて、經濟學上の原理に照らし、價格なるものが如何にして決定せらるゝかを述べよう。即ち各人は自己の利害を十分能く了解することが出来、何等強制を受くることなき状態に在るのを見て價格を考察し、統制其他の事情は別に論究せんとするのである。

斯くして、價格は如何にして定まるかと言へば、價格は多數の者が相寄り相競争して其の結果定ま

るのである。之を經濟學上の語で言ひ換へれば、需要供給の關係に依つて定まるのである。此の需要と云ふのは、或る價格で買入れんとする財の分量であつて、唯だ漠然と財を欲する所の念とは違ふのである。即ち單に或る財を欲しいと思ふのは欲望であつて、欲望はまだ需要ではないのである。此の欲望があつて、そして或る價格で若干の財を買はんとするに及んで、茲に初めて需要となるのである。故に需要は(A)買手の數(B)買手の得んとする財の分量(C)その財に對する買手の認むる價值(D)買手が其の買入るゝ財に對して支拂ふ所の貨幣に認むる價值に依つて定まるものである。そして又た此の需要者の數と買入れんとする財の分量とは、人口の大小その人民の年齢及び性(老若男女の謂ひ)欲望の強弱其の弾力性及び一般文化の程度に依つて定まり、尙ほ將來を豫想する心理的作用の影響を受け次に財に認むる價值の大小は、その財に對する欲望の順序及び強弱に依つて定まり、最後に貨幣に對する價值は、財産の状態及び収入の關係並びに其の財産及び収入によつて充たさるゝ欲望の關係に依つて定まり、そして其の關係は、その一般經濟の富の程度併びに富の分配の如何に依つて定まるものである。

次に供給の方は、或る價格で賣らうと思ふ財の數量であつて唯だ單に財が實際に存在して居るといふだけで、或る價格で賣らんとする意思のない場合には、まだ供給と云ふ譯には行かぬのである。但



し取引所に於けるが如く、實際手許にないものでも將來手に入れて引渡す考で賣る場合には、その當時はよし手許になくとも、尙ほ供給と稱することが出来るのである。そこで供給は(A)賣手の數(B)賣手に依つて供給された財の分量(C)供給する財に對して賣手が認むるところの價値の大小(D)賣手が供給した財の對價として得る貨幣に對して認むるところの價値の如何に依つて定まるものである。而して賣手の數と供給する財の大小とは、人口及び其の國民の社會經濟上の狀態及び生産費の多少に依つて定まるが、賣手が其の財に認むるところの價値の大小は、分業の既に行はれて居る經濟社會では、賣手が其の財に認める價値であることは稀である。何となれば、生産者は其の生産する財を自己の欲望を満足させるが爲めに生産するのではなく、之を以て他の財と交換し、之に依つて利益を得んとするからであつて、詳言すると、若し其の財を他のものが需要しない場合には、その財は潰し値の如き最小限に下落して了ふのである。それから最後に賣手が貨幣に對して認むるところの價値は、貨幣の價値の大小併びに支拂の具として賣手が貨幣を要求する程度によつて定まるものである。

需要供給とは以上の如きものであるが、價格は此の需要供給兩者の投合に依つて定まるので先づ需要供給と價格との間に如何なる關係があるかを見るに、需要が増加したとき若しくは供給が減少したときには、價格が騰貴するし、需要の減少したとき若しくは供給の増加したときには、價格が下落す

るし、之れに反して、價格の方が騰貴すれば需要が減少するか或は供給が増加するし、又た價格が下落すれば需要が増加するか或は供給が減少するものである。尤も此の一般的規則は、財の性質によつて多少斟酌せねばならぬ點があつて、例へば、價格が騰貴すれば供給が増加し需要が減少するとは云へ、古人の書畫の如き供給に限りのあるものは、價格が騰貴しても供給は増加することなく、又た日用品の如き是非共必要なるものは、價格が高くなつても、需要は中々減少しないのである。之に反して、價格が下落しても、大なる固定資本を投じて事業を經營して居る場合であるならば、俄かに機械の運轉を中止して事業を縮小し供給を減少することは出来ないのである。又た日用品の如きものは、安いからと言つて餘分に消費の出来るものでないから、これも價格が下落しても需要を増加しないのである。併しながら一般的に言へば、右の規則は間違のないものであつて、此の需要供給の増減に依つて價格は定まるのである。然らば需要供給は如何にして投合するかと言へば、需要が増加して供給が減少すれば、其の價格の騰貴するのは前述の如くであるから、買手の中には其の財を必要とし、之れに大なる主觀的價値を認め、高くとも之を買入る者もあるのであらうが、併し他の者は價格が騰貴すると、之れを買入ることを欲しないに相違ないのである。それゆゑ需要は漸次減少することゝなるのである。而して又た他方には以前價格の安かつたときには賣ることを欲しなかつたものも、價格

の騰貴を見ては競うて賣出すやうになり、こゝに供給が増加するから、此の場合一方には需要が減少するし、他方には供給が増加して、かくして此の兩者は或る所に於いて、その投合點、一致點を見出し、茲に始めて需要供給の投合と云ふことが見られるのである。

### 第三節 價格と生産費

次に尙ほ茲に少しく説明して置き度いと思ふのは、久しく經濟學說の中で重要視せられて居るところの彼の生産費說のことである。此の生産費說を以てしては、價值や價格の現象を完全に説明することは出来ぬので、素より缺點はあるが、併しそれにも拘はらず一面には又た眞理を含んで居るのであるから、全然之を棄て、顧みぬのは宜しくないのである。現に生産費は價格を決定する全部の原因ではないが、價格を決定する需要供給の中の供給の高を決定する極めて重要な原因である。それから經濟財には實際上種々なるものがあつて、此等種々なる財に對する需要供給は果して那邊に於て一致投合し、その價格を決定するや、と云へば、それにはそれ等の財を類別して一々考察するのが便利となるのである。而して其の類別は生産費を標準とし、第一生産費を増加することなしに増加し得べきもの第二生産費を増加しなければその生産を増加することの出来ないもの、第三もと／＼その生産を増

加することの困難なる性質のもの、及び第四副産物、此の四種になるのである。

さて第一種に屬する財の價格は、其の生産費が重要な關係を有して居るもので、實際に於ては、生産費說に依つて説明するのが便利であるのである。即ち此の種に屬するものは所謂工業品と稱せられる所のもので、此の工業は普通大仕掛の資本主義的生產組織を以て生産して居るのであるからその生産額を増加するのは甚だ自由であるのである。又た其の生産は、大規模の組織に依るが故に規模を擴張すれば其の生産費を安くすることが出来る性質のもので、往々報酬漸増の法則が働くと云はるものである。それゆゑ工業品の價格は、生産費に依つて支配せられその最低の生産費に歸着する傾向があるのである。随つて其の生産費が高くなれば、その價格も高まり、その生産費が安くなれば、その價格も亦た安くなるのである。殊に今述べた様に生産を増加すれば、生産費を減ずることが出来るから、需要が多くなれば、其の生産額を増しその價格が却つて安くなる筈である。又た社會の進歩技術の發達も此の種の價格を低落せしむるに與つて力あるものである。尤も茲に斷つて置くのは、自由に其の生産を増加し得べき財の價格はその生産費に歸着する傾向があると云ふことであつて、生産費で定まると云ふのではないのである。又た實際生産費そのものは不確定のものであつて、生産費は決して一定不動のものではないのである。蓋し生産に従事するものは、それ／＼異つた事情の下に在つ

て働いて居るのであるから、各生産者間に生産費の一致を見ることの出来ぬは勿論のことであるし、同一の生産者に就いて見ても、その支拂ふ所の賃銀を初め、買入れるところの粗製品や機械器具の類に至るまで、その価格は時々變動して高い時もあれば安い時もあるのであるから、到底そこに一定の生産費を見出すことは出来ぬ等である。尙ほ或る場合には、生産物の個々の生産費を見出すことがテンド不可能なことがあるのである。例へば靴屋が靴を生産するときの如き、假りに婦人の靴を一足男子の靴を一足作るとして、他の事は兎に角、その道具を損傷する程度が、婦人用の靴と男子用の靴とに於て幾何程違ふものであるか、之を知ることが殆んど不可能であると云はねばならぬのである。又た鐵道貨車の場合に於ても矢張同様であつて、同じ重量の物を運搬するにしても、鐵を運搬する時と穀物を運搬する時と又た家畜を運搬する時とは、その場合々に依つて何れも貨車に損傷を與ふる程度が違ふのであるが、併しその差異を精確に計算することは至難のことである。斯う云ふ風で、個々の生産費を精確に算出することは到底出来難い場合があるのである。斯う云ふ場合は、唯だ生産に關する収入支出を計算して、僅かに全體の生産費を知ることが出来る位に過ぎぬのであるから、生産費は嚴密にいふと頗る不確定の性質を帯びて居るものである。併しながら、或る程度までは原價計算其他により勿論之を算出することが出来るので、自由に生産を増加し得る財の價格を定むる場合には、

此の生産費はその不確定なるにも拘らず、頗る有力なる勢力となるのである。蓋し生産に従事するものは、生産物の價格が其の生産費以下に低落するやうのことがあれば、人情として誰れも損をして仕事をすると云ふものはないから、其の生産を中止するか、少なくとも幾分生産額を減らす位の手加減はするから其の供給は減少するに相違なく、而して供給が減少すれば、價格は漸次盛り返して來るのであるから、價格は一旦は生産費以下に低落しても、久しきに亘つてその状態を維持することはないのである。此の反對に、價格が生産費以上に昇つたとすれば、苟くも競争の自由なる限り、人はその高き價格に依つて利を博せんとして、争うてその生産額を増加するに相違ないから、こゝに供給が増加せられ其の價格は漸次下落して、再び生産費に歸着することになるのである。かくして價格は久しきに亘つて生産費以上に高くなつて居ることもないのである。

次に第二種のもの即ち生産費を増加しなければその分量を増加することの出来ないものは、多く之を農産物に見るのである。抑も農業上に於いては、生産の増加を圖らんとすれば、土地には彼の報酬漸減の法則が働いて居るのであるから、勢ひこれまで人が手を附けなかつたやうな悪い土地を新たに耕さなければならぬことになるのである。さうすると生産費が高くなつて來て、従つて農産物の價格は最高の生産費に歸着する傾向を示すのである。即ち米の如きものは之を産出する田に肥えたもの

と瘠せたものと幾種の等級があるから、その生産費も亦た種々の差等があるのである。元より悪い土地を耕すのは利益でないとは知れて居つても、農産物の需要が増加して来て、その供給を増加しなければならぬ必要があれば勢ひこれを耕すやうになるのである。それゆゑ人口が増加すれば、農産物は一般に騰貴の傾向を示すものであつて、斯く農産物の価格は最高の生産費に依つて定まるものであるから、優等の土地を耕すもの、生産費は、下等の土地を耕すもの、それに比して安い道理である。従つて茲に餘分の利益が得らるゝ筈であつて、此の利益は地代として地主に支拂はるゝのである。尙ほ地代のことは、後章に於いて説明することにする。

次に第三種のもの即ちもと／＼其の生産を増加することの困難なる性質のものは、例せば古代の器具、大美術家の手に成つた美術品の如きものであつて、斯やうなものは、如何に需要が増加しても供給に制限があるのであるから、其の価格の定まるのは、その生産費に依るものではないのみならず、尙ほ又た一般価格の標準としても、あるのではなく、其の価格は、之を得んとする人の欲望の強弱と、その支拂能力の如何とに依つて定まるものである。それから彼の獨占の場合の如きも、此の第三種の中に含めることが出来ぬと云ふ譯ではないが、併し兩者の間には、斯ういふ區別があるのである。即ち第一獨占の財は之を普通の財（獨占的のものでない所の）と明白に區別することが既に困難である

し、第二に、獨占の財は、其の數量に制限がありはするが、之は多く生産者の意思に依つて然るものであつて、生産者にしてその數量を増加しやうと思へば、自由に増加することが出来るのであるから、彼の古代の器具や大美術家の手に成つたところの作品などは、大に趣を異にして居るのである。抑も獨占の財は、その利益の最も多いやうに其の価格を定めるものであつて利益を最も多く得る目的で価格を定むる方法には、生産物の數量を少なくしてその価格を非常に高くするものと、価格を安くして多數の需要者を求め所謂數でこなすと云ふ風にして利益を多からしむるものとあるが、獨占の場合には、其の孰れにもせよ總賣上價格から總費用を差引いて、其の残りの最も多い様に其の価格を定めるものである。今其の一例を示さば、茲に一の商品あり、其の生産費は一個五十錢宛なりとし、若し之を三圓に賣れば、八百個を賣ることを得べく、五圓とすれば五百個を賣ることを得べく拾圓とせば百個を賣り得るに過ぎずとすれば、其の總賣上高は百個の場合は千圓、五百個の場合は二千五百圓、八百個の場合は二千四百圓である。然るに其の生産費は各々四百圓、二百五十圓、五十圓となるが故に總賣上高より其の生産費を差引く時は、三圓の場合には二千圓の純益あり、五圓の場合には二千五百圓の純益あり、十圓の場合には九百五十圓の純益を得るに過ぎない。故に此の場合には其の価格は最大なる純益を得る五圓と定め五百個を賣るの方針に出づるのである。

次に第四種の副産物の場合は、これ亦たその価格と生産費との關係を知ることが甚だ困難で此の場合には、或る産業が或る財を生産すると同時に副産物を生ずるので、例へば肉を得る目的で家畜を飼養して之を屠殺すれば肉の外に皮も角も骨も得ることが出来ると云ふやうなもので、此の場合皮以下のもは即ち副産物である。又た瓦斯を製造すれば瓦斯の製造と同時に骸炭を得ることが出来是れ亦た副産物である。それで、かゝる場合に主産物と副産物との価格は如何にして定まるかと言ふに、一般の原則としては、主産物副産物双方の価格が全體の生産費を償ふことの出来るやうに定めるのであつて、生産者は全體の上より見て、最も大なる利益を得るやうに努めるのである。然らば如何にせば、最も大なる利益を得ることが出来るかと言へば、普通には先づ主産物の方を出来るだけ高く、賣るやうにし、副産物の方は殆んど眼中に置くことなく、消費者の方で買入れんとする言ひ値で賣る位のことに見て置くのである。そこで主産物の方の価格が騰貴すれば、其の生産を増加し、従つて副産物の生産も亦た増加するから、副産物の価格は普通に安くなるべき筈であるが、併し時としては市場の状況が變つて、副産物の価格が著して騰貴し、主産物よりも副産物が却つて重きを置かるゝやうになることも必ずしも無きにしもあらずである。

#### 第四節 貨幣の價值

財の交換價值は其の交換の割合の示さるるによりて、明白となること既に述べたるが如くであるが、此の交換の割合は物々交換の行はるる時代ならば格別、其の時期を脱して進歩すれば最早財の相互的分量によりて示さるることなく、殆んど凡て貨幣によりて表現せられるのである。換言すれば今や貨幣は殆んど凡てのもの、交換の割合、即ち價格を表示するものである。従つて現在に於ては價格は財と貨幣との交換の割合を表はすもので、其の交換せらるる貨幣の量増加すれば之を騰貴と言ひ、其の量減少すれば之を下落といふなれども、價格は財の交換價值を示すもので、其の反對に貨幣と交換せらるる財の量は貨幣の交換價值を表はすものたるや素より當然だと言はなければならぬ。

然るに財の交換價值は貨幣を以て表現せられ、貨幣の量を以て示され、それを價格と稱せらるるも貨幣の交換價值は財の交換の量によりて示されながら、普通にそれを貨幣の價格と言はないのである。何故ならば價格は貨幣を以て表現せらるるものなりとすれば、貨幣の價格は又貨幣を以て表現しなればならないこととなり、貨幣の價格を貨幣を以て表現するといふことは之れ論理上、矛盾し、不可能で思惟し得られないからである。換言すれば價格を表示すべきものゝ價格といふこととなり、價格

を表示すべきものか、其の自らの価格を自らの価格を以て表現しなければならぬことになるからである。それ故にこそ、貨幣は其の価格と言はずして其の価値と言ふのである。されば其の価値はいふまでもなく交換価値を指し實質的には価格であるのである。

之れが爲めに價格の一般的關係なる物價の騰貴は其の反面に於て貨幣價值の下落を示し、物價の下落は貨幣價值の騰貴を現はし、現在は貨幣價值大に低落して物價騰貴するインフレーション時代といふのである。

斯くして貨幣の価値は其の交換価値で、財との交換の割合なれば、貨幣が財を購買し得る力で、之を貨幣の購買力といふのである。而して此の購買力は米は一石四十二圓なりといふが如く、四十二圓を以て米一石を購買し得るを示すもので財の價格によりて表はされるものであるから、其の變動は、財の價格の高低によりて之を知ることが出来るのである。然るに個々の財は、その價值が屢々異なりたる方向に變動するものである。即ち或る財の價值が騰貴する一方には、或る財は下落することがあるのであるから、貨幣の價值の變動は、個々の財の高低を以てして之を知ることが出来なくして、必らずや一般の財に對する購買力の如何に依つて之を求めなければならぬのである。換言すれば物價によるのである。併し「一般の財に對する購買力」即ち物價と云うても、財の價格は素と財と貨幣と

の交換の割合であるから、若し財の方面にか、或は貨幣の方面にか、何れか一方に價格動搖の原因があれば、兩者交換の割合も亦た變動せざるを得ないのである。是れは恰も牛と羊との交換の割合が初めは牛一匹と羊七匹との割合であつたものが、變化して牛一匹と羊九匹と云ふ割合になつたとすれば、此の交換の割合に於ける變動の原因は、牛の方面にも、羊の方面にもあり得るが如きものである。それ故、貨幣價值の變動を知ることが、必ずしも容易ではない。併しながら貨幣の價值は既に述べたるが如く、一般の財の貨幣に對する交換の割合であるから、財の方面より起る交換の割合を變動せしむるものも、亦た一般的でなければならぬのである。而して此の一般的のものは如何なるものであるかと言へば、財の供給の側に在りては自然、技術、及び經濟上の事情に基ける一般の生産費、運搬費の増減であるとか、需要の側に在りては、消費者嗜好の一般的變遷であるとかによりて起る所のものであるけれども斯の如きは常に發生する原因ではない。一般的關係は多く貨幣の側に存する原因によつて變化するのである。其れ故、貨幣の方面にある貨幣の價值を決定する原因を検討し、考察すれば貨幣の價值は之を知ることが得るのである。

貨幣の價值に關しては種々なる學説がある。貨幣の價值はそれを構成する素材の生産費に依りて定まるといふ生産費説あり、信用が價值を決定するものなりとする信用説あり、貨幣の價值は貨幣の限

界效用によりて定まるといふ限界效用説あり、又最も古く且つ廣く行はるる數量説即ち貨幣の價值は貨幣の量に依りて決定されるといふ説がある。されど茲には貨幣の價值は實質上、價格に相當するものなりとする以上の見解に基き價格は需要供給によりて決定せらるゝものなれば貨幣の價值も又其の例外をなすものではないから貨幣の價值を決定する原因は何であるかといへば、それは貨幣自體の需要供給である。と言はなければならぬ。然らば「貨幣の需要」とは何ぞやと言へばそれは其の一般經濟社會に於て必要とする貨幣の分量であつて、更らに詳しく言へば、貨幣は交換の媒介をなすものであるから、貨幣の媒介によりて行はるゝ交換が多ければ多い程、貨幣を多く必要とするし、之に反して、交換が少なければ少ない程、その必要は少なくなるのである。また租税であるとか、贈與であるとか云ふ一方的の支拂、並に資本の移動の大小等に依つても、其の必要の程度を異にするし、また個人若しくは會社が日々取引の爲めに備へて置く準備金、殊に銀行の準備金或は貨幣の貯藏を唯一の目的とする者の貨幣の死藏等も皆貨幣に對する需要であるのである。それで、貨幣の需要のことは、以上を以て略ぼ盡きて居るのであるが、併し此の需要は尙ほ他に一二の勢力あつて大なる影響を受けるのである。

然らばその勢力は何んであるかといへば、第一は貨幣の利用といふことである。即ち貨幣は之を利

用する程度が少なければ少ない程、多くを要し、利用の程度が多ければ多い程、少なくして足るものである。そしてこゝに云ふ所の「貨幣の利用」とは、今までの學説に依つて知られた彼の「貨幣流通の速度」と略ぼ同義であるが、尙ほ多少の差異があるのであるから、少しく其の意味を説明すると、貨幣利用の程度は、同一の國民經濟社會に於ても、其の社會の階級に依つて異なるものであつて、例へば、一週間に給料を受取る労働者は、受取つた當時は多少金を餘分に持つて居るが、大抵は其の生活に追はれて、次の週の六日目頃には、其の受取つたものを支出し盡くして了ふのである。また一月毎に給料を受取る所謂「月給取」は、受取つた當時は金を持つて居るが、翌月の月末になれば、漸次手許が淋しくなるのである。更に又た年に二回若くは一回の勘定日に金を受取る者は、受取つた當時は多くの金を持つて居るが、次の勘定日間際になれば其の日の待たるゝことになるのである。それで、此の三者を比較すると、一週間に給料を受取る労働者の金は、一週間に出入するから、其の利用が多く、月給取の受取る金は、労働者の受取る金に比すれば利用が遙かに少く、半季若くは一年毎に受取る者の金は、其の利用が最も少ないといふことになるのである。

更らに社會の階級の異なるに依つて資金の出納が公平に分配されるものと分配されないものとがあるのであつて、公平に分配されるものは、それだけ金を利用することが多く、隨つて此の階級にあり

ては貨幣の需要は小額で足り、公平に分配されないものは、貨幣の利用の程度が少なく、随つて此の階級にありては貨幣の需要が多いのである。今農商工の三者を比較すれば、農業は收穫期が年一回であるし、工業は粗製品を製造品にするまでに時間がかかるが、併し此の時間は農業の收穫期間に比すれば遙かに短かく、商業となれば何時にても其の商品を賣買することが出来るのであるから、商業は工業より、工業は農業より、一年に亘つて支拂が公平に分配されるのである。斯う云ふ次第であるから、人口が増加し、商工業が発達し、交通の便が開けた處では、人口が稀薄で農業を主なる産業として居る交通不便の處よりも、その取引の總額に比して割合上僅少な貨幣を必要とすることになるのである。

それから第二には信用である。抑も信用は貨幣を一時不用の處より必要の處に移し、また貨幣に代つて交換の媒介をなすものであるから、信用機關が発達し、銀行に預金をする者が増へ、振替、小切手、手形の使用等が盛んになればなる程實際貨幣を使用することは少なくなり、随つて信用の發達した處には信用が貨幣に代り、貨幣そのものの必要は少なくなるのである。

貨幣の需要は以上の原因によりて定まるものであるが、之に關して茲に一の問題がある。其れと云ふのは、貨幣の需要は以上述べたる原因によりて定まるものとすれば、或る一社會に要する貨幣の分

量は如何と云ふこと、即ち或る一社會の需要する貨幣の分量は幾何であるかと云ふこと之れである。是れは數字に現はすことは至難の業であるが、併し社會が必要とする貨幣の額は凡そ一定して居るので經驗上其の大體を観察し得るのである。

また貨幣の需要は決して一定不變のものではなく時々變動するのである。而してその變動には種々なる原因があつて、先づ大勢を支配するものとしては、經濟の進歩、人口の増殖、生産の増加、交通の發達、富の増大、信用制度の發達等である。而して時々々の變動を起す原因としては、經濟社會の景氣、不景氣である。若し此等の原因より惹起さるる我國に於ける貨幣需要の變動を知らんとせば、日本銀行及び手形交換所の報告、並に割引歩合の高低等を見れば、其の概要を知ることが出来るのである。

次に「貨幣の供給」に論及すれば、金屬貨幣本位の制度が行はるる時には貨幣の素材は主として貴金屬であり、貴金屬の中では、銀は補助貨にのみ使用せられ、金は本位貨であるから、貨幣の供給に關しては、金の産出額が最も重要な關係を有することは、敢へて言を俟たぬ所である。而して金の産出は金坑の發見に依るのであるが、其の發見は必ずしも自國に於てせらるゝを必要としないで、世界何れの處に於て發見せられても宜しいのである。何故であるかと言ふと、金は其の容積と重量と



に比して價值の大なるものであるから、運搬に便利で、費用を要することが少なく、随つて世界到る所に運搬せらるゝからである。これはまた金が世界何れの地に於ても甚だしく其の價值に差違を生ぜざる所以である。

貨幣需要の増減と金産出の増減との間に何等かの關係があるかと言へば、貨幣の需要も、金銀の産出も、互に別種の原因によりて支配せらるゝことが多く、概して言へば、兩者の間には特別なる關係がないと稱して宜しいのである。例へば、こゝに金坑の發見があるとしても、貨幣の需要は、既に説明したところの原因に依つて増減するのであるから、金坑の發見とは別に關係がない筈である。但し、貨幣の需要が増加した一方に金の産出が減少したときには、必ず金の價值を騰貴させるから、従前は收支の償はぬ所から廢坑になつて居つた金坑を再び探掘するやうなことになる、隨つて金の産出を増加し、之に反對の場合には、金の産出を減少せしむる傾向があるのである。但し年々新たに産出せらるゝ金は、過去に於て産出せられたものに比し極めて少量であるから、既存の金に對し、供給の上より見て餘り大なる關係を有しないのである。

又こゝに一つ問題となることは、貨幣に充てらるゝ金は、如何にして國際間に分配せらるゝかといふことである。而して之に對する解答は、それは國際間の貸借若くは「國際收支」關係に依りて定まる

といふことになるのである。即ち一國が他國に對して負ふ所の債務は、正貨を以て支拂はなければならぬものであるが、之に反して貸方になつて居る所のものは、正貨を以て受取るべきものであるから、是れが即ち金を國際間に分配する原因となるのである。こゝに「國際間の貸借」と云ふのは、單に財の輸出入より生ずるものみに止まらずして、其の他の一切の貸借をも含むものである。國際貸借のことは別に詳説することとする。

次に金は貨幣として使用せらるゝ外に、工藝用としても使用せらるゝものである。即ち金は種々の器物、裝飾品、入歯、鍍金、寫眞等にも使用せらるゝのである。従て若し工藝用としての金の需要が多ければ、貨幣の供給はそれだけ減少し之に反する場合には貨幣の供給は多くなるのである。此の工藝用の金の需要は、富の程度並びに富の分配の公平なると否とによりて左右せらるゝもので、富の程度が高ければ、贅澤品の需要は増加し、富の分配が不公平なれば、一方に饑餓に通る貧民のある代りに、他の一方には大金持が出来て、かゝる人々は贅澤品を要求するから、工藝用の金の需要は自から増加するのである。

若し又、金屬本位、殊に金本位が金の輸出禁止などにより停止することになれば、管理通貨となり、硬貨と兌換せられざる紙幣、即ち不換紙幣が行はるることとなり、不換紙幣は紙片に印刷すれば

貨幣となるので其の供給は自由になり増加するのである。インフレーションとは通貨膨脹で此の情勢を指すのである。貨幣の価値は低落し、物價は騰貴することとなる。

貨幣の需要供給は、以上述ぶる所の如きものである。それで若し貨幣の需要が多く供給が之に伴はなければ、貨幣の価値は騰貴し、貨幣の供給が多く需要が之に伴はなければ、貨幣の価値は下落する。而して貨幣の価値が下落すれば、其の購買力が減少するから、之と交換せらるゝ財の割合も自ら減少し、随つて財の價格は騰貴し、之れに反して貨幣の価値が高くなれば、其の購買力が増すから、之と交換せらるゝ財の分量も多くなり、随つて財の價格は下落するのである。

貨幣の価値はかく動搖する性質を有して居るのであるが、然らば其の動搖は經濟上如何なる影響を及ぼすやと言へば、貨幣の価値が騰落しても、總べての交換の割合即ち財の價格は、同時に且つ同様に上下するのではないのである。詳しく言へば、貨幣の価値が騰貴して財の價格並に労働者の賃銀が下落するやうな傾向のある場合でも、其の影響は其の抵抗力の弱い所に先づ起るものであつて、此の抵抗力は、社會の經濟が発達し、交通が頻繁となり、取引の敏活なる處は、社會の發達が幼稚で、風俗、習慣の勢力が大である處よりも弱いのである。また小賣商よりは卸賣商の方が抵抗力が弱く、粗製品半製品は精製品よりも弱く、財は賃銀、俸給よりも弱いのである。そこで交換の割合が全く貨幣

の価値の動搖と一致するまでは、貨幣の価値の騰貴する場合ならば、可成久しく自己の財又は勤務に對しては従前の價格又は賃銀を維持し、他の財若しくは勤務に對しては安き價格又は賃銀を支拂ふのが利益であるし、之に反し貨幣の価値が下落する場合ならば、可成早く自己の財の價格若しくは勤務の賃銀を引き上げ、他に對しては安き價格又は賃銀を支拂ふのが利益であるのである。而して賃銀の騰貴若しくは下落は、其の起るのは比較的遅いものであるから、貨幣の価値が騰貴するときは、労働者を利して備主は不利益を被り、貨幣の価値の下落するときは、備主を利して労働者は不利益の地位に立つのが普通である。且つ貨幣の価値の騰貴するときは、貨幣を要求し得る者即ち債權者を利し、債務者は不利益を被り、貨幣の価値が下落するときは、貨幣を支拂ふ者即ち債務者を利し、債權者は不利益の地位に陥るものである。

更らに貨幣の価値の動搖と經濟社會全體との關係を見れば、貨幣の価値が下落すれば、物價は騰貴し、利子は下落し、企業は盛んになり、經濟界は一時大に好況を呈するのであるが、然し其の一定の度を過ぐれば、生産は過多となり、投機が盛んに行はれ、恐慌の起る原因となるのである。之に反して、貨幣の価値が騰貴するときは、利子は騰貴し、物價は下落し、企業は一般に制限せられ、生産費殊に賃銀にして未だ下落せざるときは、企業の利益は益々減少して、一時事業を中止するの已むを得

ざるに至り、遂には貨銀も亦た下落するのである。

貨幣の価値の動搖を更らに國際間の關係に推しひろめて見れば、其の關係は貨物の輸出入に現はれて來るのである。今説明の便宜上、金本位國と不換紙幣國とを例に取つて言へば、不換紙幣の貨幣価値は下落して金貨國に對して著しく下落する傾向があるから、假りに金本位國たる米國が紙幣本位國たる我國に棉花を輸出するとすれば、我國の貨幣即ち紙幣は下落して居るから、之を以て金で現はした米國の棉花の價格を換算すれば、従前より其の然らざる場合よりも高くなるのである。それ故、米國の棉花の輸出は少なくなるのである。否、單に棉花のみならず、一般に米國より我國へ輸出する品物は、同じ理由によつて高くなるから、輸出は減少するのである。又之と反對に、日本より米國に輸出するものは下落し、日本の貨物の價格は紙幣で示さるゝから、米國は之を金に換算して見ると、以前よりも安くなるのである。随つて我國の對米輸出は増加するのである。こゝに於て我が貨幣の下落は、我が海外貿易に取つては有利なる結果を來たし、恰も輸入の保護税、輸出の奨励金の如きものと同じ効果を生ずることになるのである。即ち貨幣の下落したる國は、それだけ利益を受けると云ふことになるのである。併しながら今一步深く立入つて考へて見れば、此等の利益は事實上大に制限せらるゝを忘れてはならないのみならず、よし又たこれ等の利益はあるものとしても、他の方面には貨

幣の下落より生ずる不利益があるのである。それは斯うである。即ち貨幣の下落する國がその富源を開發する爲め、外國より外資を輸入するを以て利益なりとするも金本位國の資本家は、其の貨幣の下落する國に對する放資より生ずる利益を金に換算すると、僅かなものになり、時に却つて損失になることもあるから、容易に放資をせぬといふことになるのである。それ故、紙幣國が外國の資本を自國に輸入するのはなか／＼困難であつて、若し強いて外資を輸入しやうとすれば、かゝる危險に對する報償として、普通以上の利子を支拂ふか、或は金を以て之が支拂を約束しなければならなくなる。然るときは貨幣の下落より生ずる危險は一切自國で負擔しなければならぬのである。それから爲替相場は貨幣の對外價值を現はすもので、爲替相場の上では自國貨幣が外國貨幣に對して下落するときは、恰も右に述べたるが如き國際貿易上財の輸出入に重要な影響を及ぼし、終局に於ては國際貿易を妨げることとなり、自國の物價を騰貴せしむるのである。

以上は貨幣の價值に就いて説明したのであるが、是れより此の價值の動搖を測定する方法に就いて述べよう。元來總べての財は其の價值が一定不變のものでないから、一つの財をば標準として、貨幣の價值を測定することは勿論出來ない。それ故、成るべく澤山の財を集め、或る期間に於ける此等個個の財の價格を百といふ數にて示し、之を標準として次の期間に於ける財の價格の騰落を此の百に對

する割合を以て比較し、其の比例数から割り出して、若し其の比例数が前に計算した時よりも多くなければ、それは貨幣の価値の下落したものとなし、少なくともれば、騰貴したものとす。かゝる方法に依つて、今日は貨幣の価値を測定して居るので、此の方法を稱して指数と云ふのである。この方法は多くの財の価格を標準とするから、個々の財に於ける価格動搖の原因は、互に相殺され残る所は貨幣の価値が動搖したことを示すものであるといふ所に根據を置くのである。それで此の指数はまた相場表とも稱せらるゝのであるが、併し此の指数も社會にありとあらゆる財を悉く網羅すると云ふことは到底出来ぬから、未だ之を以て貨幣の価値を測定するに完全なる方法と稱することは出来ないのである。今左に指数の例を示さう。

	小麦 (一噸)		石炭 (一噸)		銀 (一キログラム)		物價平均數	指數
	國	比例數	國	比例數	國	比例數		
第一期	160	100	20	100	120	100	100	100
第二期	180	112.5	10	50	80	66.67	90	76.39

註 極めて簡單なる例ではあるが、右表に示すが如く、指数によつて示せば、第二期は第一期より二割三分の下落である。

然るに之を物價そのものによつて計算すると、第一期の平均は百で、第二期の平均は九十となるから、僅かに一割の下落となるに過ぎぬ。是れ指数の方が正確なるを示すものである。

## 第四章 信用及信用機關

## 第一節 交換と信用

交換は先づ其の交換せらるるもの、交換價值を貨幣を以て示され、更らに實際的に其の交換は金屬貨幣や紙幣や小切手や手形などで媒介され實行せられるのである。紙幣の發行や小切手其他は銀行を通じて行はるるもので銀行は茲に極めて重要な作用をする。さうして銀行は信用の機關であるから、以下信用と信用機關との説明をするであらう。

## 第二節 信用の意義

信用とは、元來信認を意味する語であるが、併し之を經濟上より見れば、唯だ信認と云ふ道德的の意味だけでは不十分である。即ち或る人は決して偽りを言はぬから其の人は信認すべきであると云ふのは、これは道德上の語であつて、未だ經濟上の信用ではないのである。即ち經濟上の信用には、時

間の觀念を入れなければならぬのである。經濟上の取引が複雑になれば其の間に時間の關係が必ず入つて来るものであつて、一方が或る財を他人に引渡し、引渡された者は、其の場で其の代金の支拂をせず之を後日に延ばす時は、其の代金が後日に至り果して間違なく支拂はるゝか何うかといふことは、嚴格に又た完全に保證することは出来ぬのである。従て多少其の間に不確定の分子が存して居るのであるが、この時間の關係が入つて不確實なる分子が生じて、尙ほ之を疑はずに信認することが、即ち經濟上の信用である。かるが故に信用は「他人が將來支拂を爲し得ると云ふ信認である」といふことになるのである。

## 第三節 信用の種類

信用は種々に之を區別することが出来るのであつて、第一は短期信用と長期信用とである。これは期限の長短に依つて區別するのである。第二は對人信用と對物信用とであつて、對人信用は單に人格を信認するを謂ひ、對物信用は動産不動産の如き物を擔保に入れしめ、それに依つて與ふところの信用である。第三は生産信用と消費信用とであつて、之は信用によつて得たるものを生産に使用するか、或は單に消費するかといふ其の目的に依つて區別するのである。第四は公信用と私信用とであつ

て、信用を得るもの、主體によつて區別し、國家地方團體のは公の信用、個人、會社のは私の信用である。

#### 第四節 銀行の意義及沿革

信用の效用は、一國の資本を有効に使用せしめるといふことである。而して其の働きは金融機關を通じて始めて行はるので、金融機關は即ち銀行であるから、こゝに銀行のことを説明することとする。銀行とは、一方に信用を受け、之を他方に與ふるを業とする企業であるが、今其の歴史を尋ねると、既に遠き昔に其の源を發して居るのである。即ち西洋では紀元前六世紀頃ペロンに於て、東洋では支那の周の時代に於て、既に其の存在を見たのである。然し當時のものは兩替を業として居つて、未だ今日の如き信用の業務は執らなかつたのである。而して近世的の銀行は、ベニスに始まつたものである。即ち十二世紀の頃伊太利は商業の中心であつたから、諸方よりの商人がベニスに集つて取引をしたのに、其の當時貨幣は都市經濟時代のことゝて千種萬様統一したものではなく、取引上非常な不便を感じたから、或る特種の商人が此の金錢兩替の任に當ることになり、それが漸次近代の銀行に發達して來たのである。それで現今英、佛、獨の國語に銀行と言へば、これをバンクと云つて居るが、

此の語源は伊太利語の *banco* より出て居て、*banco* とは「臺」のことである。蓋し當時兩替商人は臺を市場に持出して營業をしたから、臺のことがやがて銀行と云ふことを意味するやうになつたからである。さうしてまた商人が自己の債務を果たすことが出來ないときは、この臺は破壊せられたものであつて、之をバンクォットと云つたから、今日の英語の *bankrupt* (破産) なる語が之より來たのである。

また兩替商人は其の營業の必要上鞏固なる金庫を備へることになつたから、個人は自ら金錢財寶を保管して置くよりも兩替商に頼み此の金庫に保管して置いて貰へば遙かに安全であるといふ所より、兩替商はやがて他人の金を預ることゝなつたのである。而して其の預り證書が今日の紙幣・小切手の源をなしたのである。また兩替商は其の經驗上預りたるものは盡く一時に取付けらるゝものでないといふことを悟つたから、預つた一部を他に貸出し、之に對して利子を收むることにしたので、今日の銀行信用の業務はこれより起ることになつたのである。かやうにして銀行の制度はベニスに起り、阿姆斯特ダム、ハンブルグに移り、やがて歐洲大陸に及ぶことになり、英國では十七世紀に英蘭銀行が創立せられ、英國銀行の制度は米國に及び次いで日本にも入つて來ることになつたのである。

## 第五節 預 金

銀行の業務は之を大別して三となし、第一は受働的業務で銀行が信用を受くること、即ち金を借りる方のことで、預金、紙幣及び債券の發行の如き業務を云ひ、第二は能働的業務で銀行が信用を與ふること、即ち金を貸す方で、割引、貸付の如き業務を云ふのである。而して第三は以上第一にも第二にも屬しないもので取立、保護預り、兩替、爲替等に關する業務で附隨的業務と云ふのである。この第三の業務は銀行が必ずしも營まなければならぬと云ふのではなく、唯、從來の歴史的慣習により營むまでである。さて右の順序により銀行の業務を極く簡短に説明しよう。

預金は三ヶ月六月或は一ケ年と期限を設けて預る定期の預金もあるし、要求次第何時にても支拂をする約束で預る當座預金もあるし、また引出す前數日の期間を置き豫じめ通知を發する通知預金もあるし、貯蓄を奨励し、勤儉の美風を養成し、零細の資金を集めて有用なる資本となさしむる貯蓄預金もあるのである。それで、社會には種々なる人が居るから、其の目的の異なるに随つて、銀行に金を預けるにも、種々なる方法に依つてするのであるが、右の中で金の利殖を計る者は、定期、貯蓄の方の預金をするし、金錢出納の頻繁なる商人は當座預金若くは通知預金をするのである。そして此の

當座預金は預金の中大に重要なものである。

預金の中には利子のつくものとつかぬものとがあつて、期限の設けてある預金は、銀行は其の期限内は安心して其の預金を利用することが出来るから、期限の設けてないものよりも高い利子を拂ふか、或は一方には利子を拂はなくても此の方には利子を拂ふのである。又た期限の設けてあるもの、中でも、期限の長いものは其の短いものよりも稍々高い利子を拂ふのである。そこで定期や貯蓄預金には利子をつけるが普通であるが、當座預金には利子をつけないものがあり、よしつけても其の額は甚だ僅かである。現に我國に於ても、有力なる銀行は、當座預金は或る金額以下なれば利子をつけぬことになつて居るのである。これは當座預金は何時にても支拂はなければならぬのみならず銀行は此等の預金者に無報酬にて種々なる便宜を與へるからである。即ち此等の預金をする人は金錢出納の頻繁な人々であつて、銀行は或は帳簿上の振替をしたり、或は小切手の支拂をしたり、或は送金取立をしたりして、之が爲に時間と費用とを要するから之が預つた金に利子を拂ふ代りになるのである。また中央銀行の預金には利子をつけないのが普通である。これは何故であるかと言ふと若し利子をつけることにすると、預金が多く中央銀行に集まり、中央銀行の職能上から見ると都合であると同時に、一方に普通の銀行と競争する立場に立つ虞れがあるからである。

當座預金の引出しには小切手を使用する。小切手は銀行に對する支拂の命令で、一覽拂無利子で且つ持參人拂たることが多いが、それが爲めに一般に貨幣と同じやうに支拂に使用せられる。それ故之れを預金通貨といふて居る。さうして小切手の表面に平行の横線を引きそのまゝにして置くか、或は線内に「銀行」の二字を書き入れる時には、之を一般横線小切手と稱し、その平行線内に或る格段なる銀行の名を書き入れる時には、之を特別横線小切手と稱するのである。で、横線小切手は普通の人々が之を銀行に持參しても現金を受取ることが出来ないものであつて、只だ銀行間のみ有効なものである。これは詐偽其の他の不正行爲を防ぐが爲めに發明せられた方法である。又だ銀行が小切手の支拂を保證するときには、之を保證小切手と稱するのである。

次に多數の預金者が同一の銀行と取引し、預金者相互に於て支拂を爲すときには、一々之を現金によりて爲すの必要なく、銀行帳簿の上に於て相殺することが出来るので、之を掘替といふのである。然るに多數の預金者が同一の銀行と取引をせずして、其の取引が多數の銀行に分れて居るときには、此のことが行はれないから、その時には他の方法の必要が生じて來るのである。手形交換これである。即ち甲の銀行と取引するAは、乙の銀行と取引するBに小切手を以て支拂をなすときBは其の小切手を甲の銀行に持つて行つて支拂を求めることなく、直ちに乙の銀行に預け、乙の銀行をして之れを取

立てしめると、乙の銀行は甲の銀行に對して支拂を求めることになるのである。併し銀行の数は多く銀行の取引先も亦頗る多數で、一方に右述べた如く、乙の銀行は甲の銀行の支拂ふべき小切手を持つて居るのみならず丙丁等の銀行に對する小切手をも持つて居るのが普通であると同時に、他の一方には甲の銀行を初じめ其の他の銀行も乙の銀行の支拂ふべき小切手を持つて居るのであるから、各銀行は茲に互に小切手を持つて居つて債權債務の關係を生ずるのである。然るに若し此等の銀行にして互に使の者を以て小切手の取立を爲さば、其の煩雜や思ふべく、之が爲めに夥しき額の現金を要するところとなるのである。茲に於て若し此等の銀行が一定の時日に一堂に相會して互に其の持つて居るところの小切手を交換すれば、極めて莫大なる金額の取引も、現金を用ひずして容易に決済することが出来る。それだけ資本の節約をなすことが出来るので、この方法は今日實際に廣く行はれて居るのである。即ち今日此の手續を稱して手形交換と謂ひその集る場所を手形交換所と謂ふのである。尤も手形交換所は小切手だけの交換をするばかりでなく、手形其他の交換をも併せ行ふものである。

既に述べたるが如く、預金の中で最も重要な當座預金は、要求拂であるから、何時取付けられるかも知れぬし、また其の他の預金も勿論取付けられるから、銀行は預金の取付に對して平素準備する所がなくてはならない。若し銀行が萬が一にも其の契約を履行することが出来なければ、その爲め經濟



界に甚だしき悪影響を及ぼすことになるのである。されば預金準備金は之を銀行の側より見るも、將た又經濟の上より見るも、甚だ重要なものである。此の準備金は、國に依つて、一ヶ所に集中するものもあれば、或は各銀行に分散するものもあるが、準備金の額は、幾何を要するかといへば、預金の三分の一を要すると云ふ説もあるけれど、準備金の額は、その當時の金融上の狀況その他銀行の經營上の種々なる事情を考へて決すべきもので、決して一概に極めることは出来ないものである。又た此の準備金の額を法律を以て極めると云ふことも、實際の事情を顧みないものであつて、かゝることは銀行經營者の見識と經驗とに依頼し、時の必要に應じて適當に決定するの外ないのである。

#### 第六節 紙幣の發行

銀行に預金をすれば銀行は之に對して預證書を渡すのであつて、その證書は預金を代表するものであるから、之を銀行に持参すれば、それで其の預金を受取ることが出来るのである。而して若し斯かる證書が轉帳流通すれば、これは紙幣と同じことである。即ち預金は紙幣の初めで、紙幣は之を銀行に持参すれば、何時でも本位貨幣に兌換せらるゝものである。故に之を兌換銀行券と云ふのである。此の兌換銀行券は、我國を初じめ各國とも多くは租税、海關稅其他一切の支拂に用ゆることの出來

るもので、即ち法貨として認められて居るのである。また銀行紙幣は、何時でも其の國の本位貨幣と兌換せらるべきもので、若し銀行が其の兌換を拒めば、これは契約を履行せざるもので、さうなれば遂に不換紙幣となるのである。紙幣は、元と正貨と同様に流通して、經濟の上に重要な職能を盡くし、一般國民も亦之を信用するものであるから此の兌換の制度は大に注意しなければならぬ。しかし戰爭、恐慌其他の場合には兌換を停止して不換紙幣とせらるゝこともある。

今従前各國に行はれたる兌換銀行券發行の方法を見るに國に依つて種々なる制度が行はれて居た。

第一は最多額制限法である。此の制度は、銀行に紙幣を發行し得る最多額の制限をして置き、その制限額以上の紙幣は如何様なことがあつても發行することを許さぬといふので、佛國に行はれた。此の制度は、學理上よりいへば、甚だ不條理なるものであると謂はねばならぬ。何故であるかといへば、一方に銀行が正貨の準備をして發行して居る紙幣は、何時でも其の兌換せらるゝは勿論であるから、國家が之に干渉して制限を付する必要は更にないと同時に、他方には紙幣は、經濟界の必要上是非之を増發せねばならぬことがあるのに、此の制限があつては、その急需を充たすことが出来ないからである。佛國に此の制度が行はれたのは、同國は發行額に對して莫大なる正貨準備を有したのと、又た必要が起ると時々その發行制限を適當に擴張したからである。しかし、其の後改正された。

第二は保證準備發行額直接制限法である。此の制度は、正貨準備によつて發行する紙幣には何等の制限を加へないが、正貨準備によらざるもの即ち公債や、確實なる商業手形や、大藏省證券、及び其の他の證券を準備として發行する所謂保證準備に依つて發行する紙幣は、直接にそれを制限するのである。換言すれば、保證準備によつて發行する紙幣の總額を定め、それ以上に發行せんとするときには正貨準備を必要とするので、かの有名なる英蘭銀行が此の制度を採用したのは千八百四十四年で、ロバート・ピールの制定した銀行條令に依つてこれを規定したのである。この銀行條令は通貨主義と云ふ學說に基いたものであつて、此の通貨主義はまた貨幣數量說に基いたのである。即ち「紙幣を發行すればそれだけ貨幣の數量を増し、物價を騰貴せしむるものであるが、紙幣の發行は、動もすれば其の濫發の弊に陥り易いものであるから豫じめ之を警戒し、假令之を發行しても、一國の通貨は恰も正貨のみが流通して居ると同じことになるやう、之が規定をして置かなければならぬ」と云ふのである。即ち「經濟に必要な紙幣の最少限だけは、紙幣を發行しても構はぬが、それ以上に紙幣を發行せんとするならば、必ず正貨を準備として、正貨が多くなれば紙幣を増發し、正貨が少なくなれば紙幣を回收することしなければならぬ」といふのである。然るに此の通貨主義に對しては、大に反對する者があつて、此等反對者の説は之を銀行主義と呼んだ。此の銀行主義は「通貨主義は、紙幣

は濫發せらるゝ惧れがあるといふけれども、經濟上、貨幣の需要には自ら限りがあつて、紙幣は到底無制限に流通せしめ得べきものではない。必要がなければ回收せられるのである。随つてさう無暗に増發することの出来るものでない。畢竟するに通貨主義は、貨幣の價値は其の數量だけに依つて定まると云ふ誤まれる思想より來て居るので、必ずしも正貨の増減に依つて紙幣の發行額を増減せしむる必要はないのである。」と主張した。併し實際上に於て通貨主義は銀行主義に打勝つて、英蘭銀行は二部に分たれ、一は銀行部と稱して普通の銀行業を營み、他は發行部と稱して紙幣の發行のみを掌り、その發行方法は茲にいふ保證準備直接制限法を採用したのである。但し英蘭銀行は此の制度によつて完全に其の職能を行ひ得たかといへば、其の運用の上に於ては少なくとも其の初めには、通貨主義の誤まれることを示して居るのである。その著しき證據は、此の條令を制定して以來、英蘭銀行は度々非常なる困難に陥り、三度までも恐慌が起り、此の條令を停止せざるを得なくなつたのである。されば此の制度は決して完全なるものでなく、殊に恐慌の場合に金融を緩めやうと思つて紙幣を發行せんとするも、正貨が無い爲めに紙幣を増發することが出來ずして、その爲め恐慌をして益々甚だしからしめるのである。否、英國ばかりでなく、オースタリ、ハンガリー、その他の國々も、一時は此の制度を模倣したのであるが、やがて之を改正するの已むを得ざるに至つた。それで、英國自體に於

ても、今日では此の制度の完全でないことを承認して居るのであるが、それにも拘らず、何故尙ほ千八百四十四年の銀行條例を其の儘持續して居るかといへば、それは英國人が保守的であるから之が改正をしないのと、過去の經驗に鑑みて其の運用の上に種々なる改良を施し、以て實際の必要に應じて居るからである。

第三は保證準備發行額間接制限法である。是れは世に所謂屈伸法と稱するもので、此の制度は初め獨逸が英國の制度を改良して獨逸帝國銀行に採用し、更に又我國が日本銀行に採用したものである。それで獨逸の従前の制度と日本現在の制度とは多少異なつて居る點がないでもないが、先づ大同小異であつて、共に此の第三の制度に屬するのである。此の制度を日本銀行に就いて説明して見れば、我が日本銀行は、二十二億圓までは、政府發行の公債證書、大藏省證券その他確實なる證券又は商業手形を準備として兌換銀行券を發行することが出来るのであつて、之を保證準備發行と稱し、詰り二十億圓までは、何等の正貨準備がなくとも紙幣の發行が出来るのである。併し、それ以上の紙幣を發行しようとするには、正貨を準備として持たなければならぬ。而して此の制度に於いては、此の保證及び正貨準備を以て一定の制限額迄紙幣を發行するのが常態である。が、經濟界には時に變動が起り、一時非常に多額の通貨を必要とする場合があるから、其の場合は常態に於ける紙幣の發行額のみでは

到底その必要に應ずることが出来ない。更に紙幣を増發するの必要が起るのである。然るに此の場合に如何なる方法を以てしても紙幣を増發することの出来ぬのが、既に述べた第二の方法で、即ち英國式の直接制限法であるが、之に反して第三の方法は、之が出来るのである。即ち之が第二の方法と違つて、間接制限法である所以である。例へば、我が日本の如く、保證準備の發行額を二十二億圓と確定して置いても、これは絶對的のものではなく、必要の場合にはその制限を越ゆることを許すのである。而して制限を超過した紙幣の發行は、之を制限外發行と稱するのである。但し制限外發行は之を自由に銀行の爲すがまゝに放任して置けば、恰も全く初めより制限のないのと同じの結果になるから、制限外發行をしようと思へば、必ず大藏大臣の許可を受け、且つ其の發行額に對して年三分を下らざる租税を拂はなければならぬ規定になつて居るのである。即ち一例を擧げて之を説明すれば、茲に日本銀行の兌換紙幣が三十八億圓に上つて、正貨準備は五億圓であるとすれば、差引三十三億圓だけは、保證準備に依つて發行せられて居るものである。然るに法律の上では、二十二億圓迄が保證準備の制限であるから、餘りの十一億圓は、所謂「制限外發行」となる譯である。そこで之に對して日本銀行は、租税を政府に納めなければ、ならぬので、租税を拂へば、銀行には利益が少なくなるから、假令一時必要上制限外の發行をしても、成る可く早く其の制限内に引込めやうとして紙幣の回收をす

る仕掛けになつて居るのである。それ故少なくとも理論の上では濫發の弊に陥ることがなくて済むのである。

第四は對資本額制限法である。此の制度は紙幣の發行額を銀行資本を標準にして制限するので、國に依つては全然此の方法のみによるものもあれば、他の制度と混用して居るものもある。即ち加奈陀及び米國などに於いて採用した制度は是れである。但し此の制度は適當なるものと謂ふことは出來ない。何故であるかといふと、紙幣の發行額が銀行の資本に依つて決するのでは、紙幣の増發を必要とする場合に、資本が豊富でないときには、絶對的に紙幣を増發することが出來ずして、爲めに金融の急に應ずることが出來ないからである。又、今迄米國に於ては、紙幣の發行は銀行の資本金を以て制限した外に、其の發行額に相當する有價證券特に公債證券を大藏省に預托せしめたるが故に、斯かる方法を證券預托發行法ともいふ人があるのである。

第五は比例準備法である。これは銀行の發行する紙幣に對して或る一定の割合の正貨準備を有せしむる制度で、現に米國に於て其の聯邦準備銀行に採用せしめた方法である。即ち同國に於ては、銀行は其の發行したる紙幣に對して必ず四割の正貨準備を有することを要するのである。しかしながら如何なる時、如何なる事情の下に於ても正貨準備は必ず四割を下るべからずとするときは、金融市場の

都合上時々甚しき困難を感ずることがあるから、米國に於ては、比例準備法に制限外發行の制度を參酌して居るのである。即ち紙幣は正貨準備が四割以下になつた時でも、尙ほ發行することを許されるので、其の場合には、税を支拂ふことを要するのである。又た其の發行には一定の期限が設けられて居つて、濫りに制限外發行を敢へてすることを許されないのである。獨逸帝國銀行に於ても、世界戦後此の比例法が採用された。

紙幣の發行は、一時の我國及び佛國の如く之を唯だ一の銀行に限るものもあれば、米國加奈太の如く多數の銀行に分つものもある。又一時英獨の如きは中央銀行が主として紙幣を發行するが、尙ほ他に歴史上の沿革より、中央銀行以外の小銀行にも紙幣發行の權を附與し、一時の便宜に出でたるものもあり、我國の如き外地の銀行に紙幣の發行を許す國もある。されど今日では孰れの國も漸次其の發行權を中央銀行に集中しつゝあるのである。此の中央銀行が紙幣發行權を有する集中制度と、多數銀行に發行權の分たれて居る分散制度とは、何れが可なりやと言へば、集中制度を以て可なりとしなければならぬ。其の理由は、紙幣の發行權が中央銀行に集中されて居れば、一國通貨の整統を行ふのに非常に便利であるし、また金融政策を行ふにも便利であるし、加之資力の豊富な中央銀行は、其の信用が大であるから恐慌などの際にも、他の銀行を助けて經濟の混亂を防ぐことが出來るし、尙ほまた

政治上並に財政上の困難に遭遇した場合にも、その大なる信用を利用して國家に有力なる援助を與ふることが出来るなど種々の便宜があるからである。

又た中央銀行の經營に就いては、政府自ら之を經營して國有にするがよからうと云ふ説もあるが、紙幣の發行は國家の特權であるから、紙幣を發行する銀行は國家で之を營むがよいと云ふのは理由のないことでもなく、また一方には之を民有にして置けば、その特權から生ずる利益を私立會社が獨占して、獨り少數の株主のみを利せしむると云ふ不都合もあるから、此の説は一應尤であるやうである。併し斯る銀行を國有とすれば、一國の金融機關が甚だしく政治上並びに財政上の影響を受けることになるし、また國際法の關係からいへば、國家の財産は敵軍の爲めに占領せらるゝ惧れもあるから、之は國有にしない方が宜しきを得たものであらうと考へる意見もある。但し國家の特權を得て一部少數の者が利益を獨占すると云ふ理由は素よりないのであるから、其の利益は宜しく之を國家に於て收むべきである。而して其の方法としては、紙幣の發行に課税するのと銀行の利益の一部を國家が收得するのとの二種あるが、我國に於ては現在後者の制度を採つて居る。今兩者の何れを以て可とすべきかといへば、銀行の利益は單に紙幣の發行より生ずるものばかりでなく、其の信用を利用してより得る利益も少くなく、そして此等因つて生ずる利益は、決算の後に明瞭となるものであるから、利益の

中より取る方が當を得たものである。

#### 第七節 債券の發行

債券とは、金銀の借入または債務を表示する一種の流通證券であつて、普通一般の銀行は素よりここにいふ債券を發行しないが、勸業銀行、拓殖銀行、殖産銀行及び興業銀行の如き銀行は之を發行するのである。抑も經濟社會には、種々なる階級が存在して居つて、資金を運轉するのに早いものもあれば、遅いものもある。商人は資金を運轉するのが早い方であるが、工業者は其れ程早くは運轉することが出来ず、農業者は其の收穫が年に一回で資金の運轉が最も遅い。それで普通の銀行は、此の商人と取引するのであつて、隨つて其の信用は短期であるが、農工業者の信用は長期且つ低利を必要とし、普通銀行の營むに適當のものでないから、それには特殊の銀行を必要とするのである。然るに低利長期の信用を以て貸付をするには、限りある銀行の資本を以てしては、何時までも其の貸付を繼續することが出来ぬから、債券を發行して之を賣出し、その賣上げによりて得た資金を以て更らに貸付をするのである。之れが債券であり、其の發行の理由である。

## 第八節 割 引

割引は銀行の能動的業務の重なるものであつて、手形の未だ支拂期日に至らざるものを、銀行がその取引の日より手形の満期日までの利子を前以て差引いて、その代價を手形の所有者に支拂ひ裏書によりて手形を譲受けるを云ふのである。一旦割引した手形を更らに割引するのを之を再割引と云ふのである。それで、銀行は割引の方法によれば、資本を固定することなく、確實に放資することが出来るし、經濟は之によりて資金の運轉を敏活にし、その效用を大ならしめて、産業の發達を盛んならしむることが出来るのである。併し手形の中には確實なものもあれば、不確實なものもある。即ち實際商業上の取引があつてその結果振出されたものは、眞實の手形で素より確實であるが、時として一時資金の必要に逼られた者がその融通を圖るが爲めに手形を振出し、その支拂人は確實なる義務者でないことがあるのである。かゝるものは空手形若しくは融通手形と云ひ、多くの場合に於て不確實であるのである。

割引の場合に支拂ふ利子は之を割引歩合と稱するのであつて、その歩合は(イ)金融の緩慢若しくは逼迫(ロ)手形關係人の信用(ハ)手形の期限及び(ニ)支拂地の如何に依つて高低を生ずるので

ある。又た割引の歩合には公定歩合、市場歩合と云ふものがあつて、前者は中央銀行が時々定めて公表するもの、後者は一般金融市場に行はれるところの歩合である。此の兩者の關係は我が國に於ては聊か外國と異なり公定歩合の方が市場歩合より安い。

中央銀行は一國金融の中樞となり、金融調節の職能を持つて居て、經濟全體の上から見てその割引歩合を定め、時に之を上下するのであつて、之を上下するのには、準據すべき一定の原則があるのである。即ち中央銀行は此の原則に従つて割引歩合を上下するので、之れを割引政策と云ふのである。之れが最も明瞭に現はれたのは倫敦であり英蘭銀行で、例へば今倫敦に於て正貨が海外に流出する傾向があるとすれば、その影響は經濟一般に及ぶので、時には之が爲めに經濟上大なる困難を招くことがあるから、英蘭銀行はその流出を防止する手段を講じ、其の割引歩合を引上げるのである。英蘭銀行にして割引歩合を引上げるときは、英國の金利は他の國のそれよりも割合上高くなるから、外國の資本は之を英國の銀行に預けるか、若しくは英國より取寄すべき金があつても、之を引出さずに英國の銀行に預けて置いて比較的高い利子を得やうとする。それが爲に、英國の正貨は最早海外に流出しないやうになるのである。

手形の割引を專業として居る者は、之を手形仲買人(Bill Broker)と稱し、此の手形仲買人は、銀

行より安い利子の金を借りて手形の割引をするのであるが、如何にして仲買人が安い利子の金を借りるかと言へば、銀行は差當り放資の道のない遊金を擁へて困つて居ることもあるし、またその準備金でも差支のない程度に於て利用すれば利益であるから、銀行は之を利用したいと思つて居るからである。併し、此等の資金は何時その必要が起て来るかも知れないので、之を貸付けるには期限を極めて短くしなければならぬから、その利子も亦た安くしなければならぬのである。それで、仲買人は此の種の金を借りるから利子が安いのであつて、かゝる低利の金は、之をコールマネーといふのである。

### 第九節 貸 付

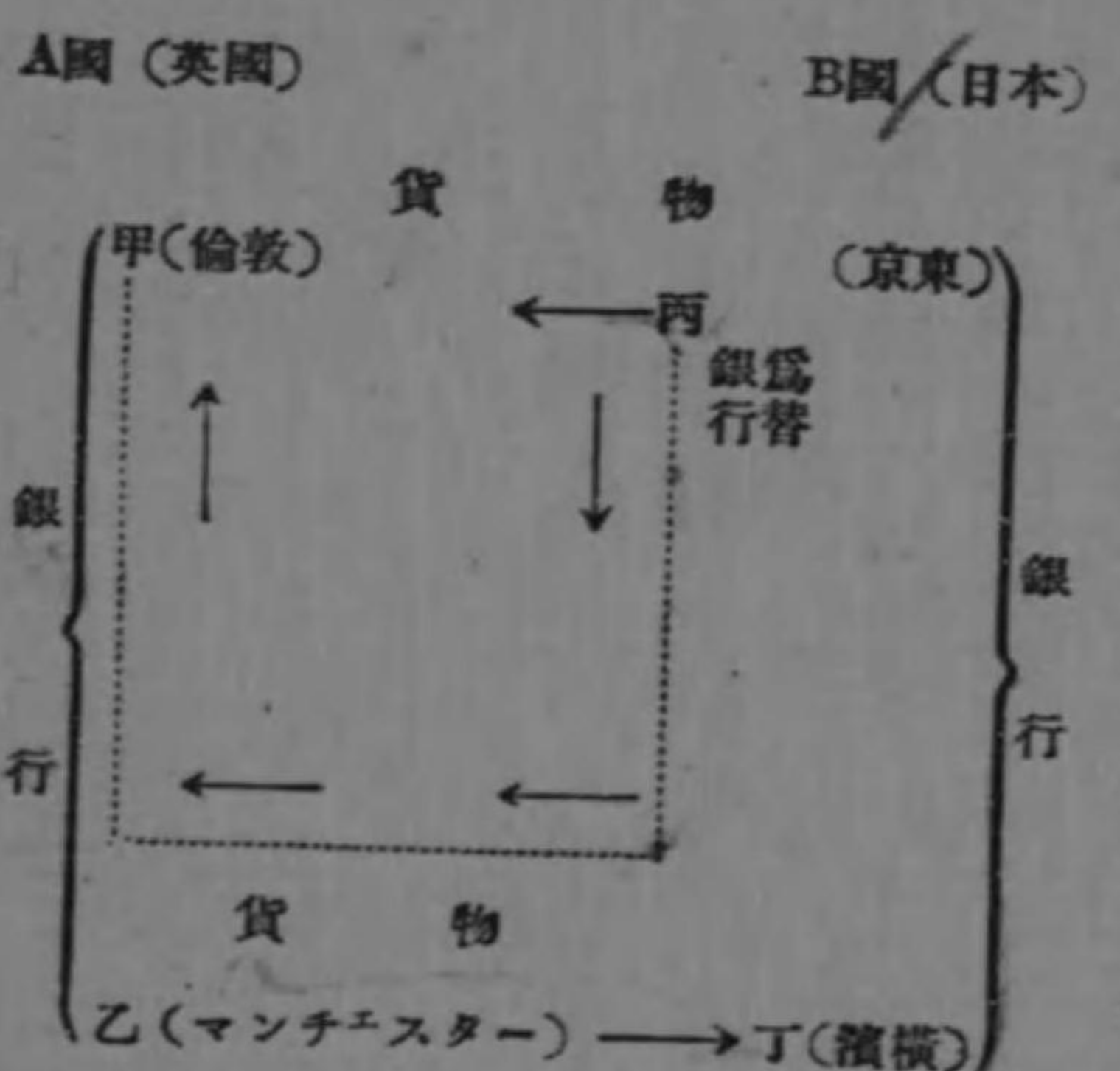
貸付とは、銀行が他に信用を與へることであつて、貸付には對人信用で貸付けるものもあれば、或は擔保を取つて貸付けるものもあるのである。又た擔保には地金銀、公債證書、大藏省證券及び商品の如き動産もあれば、土地や家屋の如き不動産もあるものであつて、擔保には銀行の種類にもよるが、普通銀行から見れば(一)保存し易くして、且つ(二)價格下落の恐れが少なく、(三)何時にても其の必要に應じて賣却することの出来るといふ三個の條件を備へたものが最も適當であるのである。我が日本銀行では、株券を擔保として貸付をすることは許されて居らないが、併し株券でもそれが確實

なものであれば、之を擔保に取つて差支のある譯はないのであるから、實際に於ては、日本銀行でも株券を擔保に取つて貸付をして居るのである。但し、それは法規を以て禁止されて居るから、表面上は素より出来ないもので、之を脱がる、方法として名を手形の割引に假りて貸付をして居るのである。即ち株券擔保の貸付をするには、申込者をして手形に確實なる或る種の許されたる株券に限り之を添へて申込ませ、銀行は手形の割引をするのである。併し手形の割引は名のみであつて、實は株券に對して貸付をするのである。而して其の割引は、手形に添付した株券を見返つてすると云ふ形式を執る所から、之を見返品制度といつて居るのである。此の外、蘇格蘭に行はれて居る所の保證人を立てしめて對人信用で貸出す保證貸付もあり、當座預金をして居る者に預金額以上に小切手を振出すことを許す當座貸越と云ふものもあるが、此等の詳細は茲には之が説明を省くことにする。

右述べた外に、銀行は一時資金に餘裕があれば、公債其の他の有價證券に放資することがあるが、株券の賣買は事、投機に互るから、注意しなければならぬ。尙ほ證券の委託賣買、保護預り、信用狀の發行、送金、金銀の賣買等も、銀行業務の一部として行ふものである。又信託の業務も併せ行ふものもあるが、今や我國に於ては信託のことは信託會社に於て特に營まれるに至つた。

第十節 爲替

最後に爲替と云ふものがあるが、爲替には内國爲替と外國爲替とがある。茲には内國爲替のことは類推することが出来るから之を省いて、外國爲替に就き少く説明を試みることにする。



外國爲替とは、債権者と債務者とが所在國を異にする場合にその必要が起るものであつて、外國に於ける金錢受取の權利を以て外國に對する金錢支拂の用に供する所のものを云ふのである。例へば今こゝにA國の甲なる者があつてB國の丙なる者より千圓の買入をすれば、A國はB國に千圓の債務を負ふことになるが、この債務を返却するには、千圓の金か又は之に相當する財をA國よりB國に送らねばならぬのである。併し正貨を送るのには、費用も入るし、危険もある。さればとて財は之を送つても直ちに賣れるものでないから、其の不便は少くないのである。然るにB國の丁なる者がA國の乙なる者より千圓の買入をなせば、今度は前と反對に、B國はA國に千圓の債務を負ふことになるか

ら、A B兩國は、互に千圓の債權と債務とを有することになるのである。故に此の場合にB國の丙がA國の甲に宛て、千圓の爲替手形を發行し、之を自國の丁に賣渡し、丁は之をA國の乙に送附し、乙は之を以て自國の甲より千圓の支拂を受けとることにすれば、B國の丙が一度爲替手形を發行したゞだけで、A B兩國の間には、毫も正貨を輸送することなくして二千圓の取引は之を完了せしむることが出来るのである。而して右の例は極めて簡単な場合を想像したもので單に爲替の一般的手續を示したものに過ぎぬが、實際に於ては、二國以外にも右の關係が及び、其の關係者の數は非常に多くなり、一個人が自身にて直接に爲替の賣買をすることは到底出来難いことであるから、銀行はかゝる商人の間に入つて、手形を振出す者より之を買入れ、手形の入用な者には爲替を賣却するのである。これが即ち正金銀行の如き特殊爲替銀行の營む業務である。

外國爲替の作用は、國際間の貸借關係に基いて發生するものであつて、國際間の貸借關係は如何にして生ずるかと言ふと、第一貨物の輸出入、第二海外放資、第三運賃・保険料・手数料、第四移民の送金、第五海外在留者及び旅行者の費用、第六戰費或は賠償金等である。次に外國爲替の價格は如何にして定まるかと言ふと、之には一種特別の事情があるのである。即ち同一の金屬より成る貨幣制度を有する國と國との間に於ては、爲替相場に中心點といふものがあつて、之を平準相場と稱し、平準相



場は自國貨幣の單位の中に包含せられる金屬の純分と、外國の同一金屬の貨幣の單位の純分とを比較して得た所の平均をいふのである。されば、本位貨幣の金屬を異にする場合には、此の平準相場といふものはあり得ないのであるが、同一の金屬を有する國際間に於ても平準相場は實際上嚴密に殆んど見ることの出来ないものである。それで平準相場より支拂勘定に於て爲替相場が高ければ、之を打歩の相場又は爲替の不利若くは爲替の逆といひ、之に反して爲替相場が平準相場より安ければ、之れを割引の相場又は爲替の利、若くは爲替の順と稱するのである。かやうに爲替相場は平準相場よりも高くもなり安くもなるけれども、それには又た一定の制限があつて、たとへ高くなつても安くもなつても、その制限を超えて上下することはないので、その制限點を正貨輸送點と稱するのである。

今之を説明すれば、もし爲替相場が支拂勘定に於て騰貴すれば、外國に支拂をする者は、その高くなつた爲替を買つて送らなければならぬから、以前よりも多くの支拂をせねばならぬのであるが、外國に債務を支拂ふ者は、爲替相場がいくら騰貴しても之を已むを得ぬこととして、必らず、其の高くなつた爲替を買つて送るかといふに、外國に支拂をする者は、爲替を送るといふ一の方法の外に、尙ほ他に方法があるのである。即ち正貨を直接に送附して、それで外國に對する債務を償却することが出来るのである。それで正貨を直接に送附するより以上に爲替相場が騰貴すれば、誰も爲替を買入れ

てそれを送附するものがなくなるのである。けれども爲替手形を送るには書留郵便で足りるが、正貨は之を荷造りし、之を保險に附し、その上で之を輸送するの必要があるので、之に對して荷造料、輸送料、保險料を支拂はねばならぬ。であるから、爲替相場が騰貴しても、正貨と之を輸送する費用とを合せたもの以上に騰貴することはないのであつて、此の騰貴の限りのある限度を正貨輸出點と稱するのである。又たこれに反して、爲替相場が下落すれば、爲替を振出して賣らんとする者は、從前よりも安く賣らなければならぬのであるが、これまた如何に安くなつても、是非賣らなければならぬかと言へば、さうではなく、爲替を振出さず外國に在る債務者より正貨を送らしむることが出来るのであるから、若し爲替が下落して正貨を送らしめる方が利益となれば、爲替を振出す者がなくなる譯である。そこで爲替相場の下落は正貨よりその輸送費を差引いたものより以下に下落することはないのであつて、此の下落の限りのある點を正貨輸入點と稱するのである。

かやうに爲替は其の平準相場を中心として、騰貴しても下落しても此の正貨輸送點以外に動搖することはないのであるが、併し其の限られたる範圍内では種々に騰落するのであつて、此の騰落の原因は如何なるものであるかといへば、第一は需要供給である。即ち輸入が多くして外國に支拂をなす者が増加し、爲替を求むる者が多ければ、爲替に對する需要は増加してその價格を騰貴せしめ、輸出が

多くして外國に對する債權者が増加すれば、爲替を振出す者が多く、隨つてその供給を増加して、その價格を下落せしむることになるのである。それから第二は期限であつて、爲替の期限の短いものは、長いものよりも確實で且つ早く金を受取ることが出来るから、その利子を失ふことが少く、期限の短いものは、長いものよりも其の價格が高いものである。但し爲替の利子は爲替を振出した國の利子によるのではなく、支拂地の利子によるのである。是れは爲替を拂出せば其の支拂地に送附せられ、支拂地の銀行で之を割引して、そして支拂期限の至るのを待つのであるからである。又た外國爲替は普通長期爲替と短期爲替とに區別するのであつて、一覽後十日以内に支拂はるゝものは短期爲替で、其の他は皆長期爲替である。而して爲替には三ヶ月の期限のあるものが今も尙ほ最も多いのである。それから第三は信用であつて、必らず支拂はるゝといふ信用のある爲替は、支拂はるゝや否やについて疑があるもの、即ち信用の少ないものよりも高いのは當然である。又た爲替は普通之を區別して商人手形及び銀行手形の二となし、銀行手形は振出人又は支拂人か、或は両者が全然銀行であるもので、單に商人間の手形よりも信用の多いものである。

爲替相場は先づ以上の如くにして定まるものであるが、併し場合に依つては、常規を逸して其の相場の動搖することがあるのである。それは戦争、恐慌或は一國の貨幣が甚だしく磨滅したと云ふが如き或は正貨の輸出を禁止するが如き特別の場合であつて、かゝる場合には、その原因が消滅するまではその動搖を防ぐことが出来ないのである。但し一時の經濟上の原因によつて、爲替相場が動搖し、一國の正貨が夥しく海外に流出すると云ふやうなときには、その國の中央銀行は割引政策を行ふてその動搖を防ぐことが出来るのである。

此の外に爲替の裁定 (佛 Arbitrage, 英 Arbitration) と云ふことがある。是れは其の手續が極めて煩雜であつて、一々こゝに之を説明することは出来ないが、詰り如何にすれば最も安く爲替を利用して海外の支拂を爲すことが出来るかと云ふ計算をして、爲替を取組むことである。而して直接に甲乙二國間で何づれから爲替を取組むべきやを定むる直接の裁定もあり、又た三國或は四國に互つて取組む間接の裁定もあるのである。それで、此の方法は何時でも一番安い爲替を買入れやうとするのであるから、此の方法が行はるれば、高い爲替に對する需要が減つて、安い爲替に對する需要が増加するので、これ亦た爲替相場の動搖を救済する一方法と見ることが出来るのである。

爲替相場が支拂勘定に於て騰貴すれば如何なる影響を來たすものであるかと言ふと、輸入商は輸入した貨物に對して多くの支拂をしなければならぬことになるから、一國の輸入が減じ、輸出商は多くの支拂を受けることになるから、輸出の利益が多くなつて、一國の輸出は増加するのである。爲替相

場下落の場合は其の反對である。

最後に注意すべきことは、爲替相場の建方と云ふことである。以上の説明の中で「爲替相場の騰貴」「下落」と云ふ語が出て居るが、これ迄の説明は實は支拂勘定の建方を標準として言つたものである。然るに爲替相場の建方には、今一ツ受取勘定といふものがあるのである。即ち支拂勘定とは、外國貨幣の單位を標準として、それに對して自國の貨幣幾何と云ふやうに現はすもので、例へば英貨一磅につき邦貨十四圓二十五錢と云ふが如きものであつて、此の建方は歐洲大陸諸國並びに英國が、東洋及び米國などに對して採用して居るものである。受取勘定とは、自國貨幣の單位を標準として、外國貨幣幾何と現はすものであつて、例へば邦貨一圓につき英貨一志二片と云ふが如きもので、此の方法は我が日本が採用して居る建方であつて、また英國が歐洲大陸諸國に對して採用して居るところのものである。そこで爲替相場が騰貴し、下落するといふが、それは支拂勘定であるか、受取勘定であるかに依つて、全く反對の意味になるのである。即ち支拂勘定の建方に於ては、打歩のときに高くして、割引のときに安くなるが、受取勘定の場合に於ては、打歩のときに安くして、割引のときに高くなるのである。かやうな次第であるから、騰貴下落と云ふことをいふに付ては、先づその建方を知らなければ、正確に之を理解することが出来ないのである。但しこれは必ずしも爲替相場に限られたこと

ではなく、普通世間でも例へば米一升が五十錢と云ふのと、一圓につき米が二升と云ふのと、二つのいひ方があるが、これも亦唯だ見方が異なるばかりで、其の内容は同一である。即ちその標準の如何によつて、同じものでも言ひ方が別になるのである。唯だ米の場合には、一圓につき二升が一升五合になれば、誰も之を下落したと言ふ者はなく、騰貴したと言ふであらう。が、爲替相場の場合には、米の一升或は二升到當るものが貨幣で言ひあらはさるゝ所から、之を下落したと言ふまでである。

## 第五編 分配

### 第一章 分配と所得

#### 第一節 分配の意義

自給自足の經濟に於ては、人は皆自ら生産した物を自ら消費する状態にあるから、分配と云ふことはまだ起らぬのである。併し現今の如き經濟機構で、分業が盛んに行はれ、各人銘々に特別な業務に従事して居る社會では、如何なる生産物も、その材料を得ることから、之に加工し、又た之を販賣するに至るまで、悉く一人ですると云ふことは、極めて稀有のことであつて、或る者は土地、或る者は勞力而して或る者は資本を提供すると云ふ風で、それ等のものが結合して初めて財が生産せらるゝのである。従て、その生産の結果と云ふものも亦た之に従事した者の間に分配せらるゝことになるので、

本編に於て論ぜんとするものは、即ち此の分配のことである。

## 第二節 分配と所得との關係

分配と云ふことは、取りも直さず所得の問題に歸するので、所得とは、何んであるか。それを決定して置かなければならぬのである。即ち所得とは、或る一定の期間に確實なる見込のある業務より得る所の總ての財より、其のこれを得るがために要した總ての費用を差引いて而して残つたところのものを云ふのである。或る一定の期間に確實なる見込のある業務より得ると云ふのであるから、贈與、相續、或は富籤の如きものは、之は臨時に得るものであつて素より繼續的のものでないから、茲に所謂所得といふことは出来ぬ筈である。元來所得の意義に關しては種々の議論があつて、中には所得とは、「規則正しく繰り返さるゝものなりといふものもある。それに對して苟しくも世の中に所得の一定不變と云ふやうなものは到底見られるものではない。若し所得にして必ず規則正しく繰返さるゝと云ふことが必要であるとすれば世の中に所得なるものはないと謂はねばならぬ。」と言つて反對したものもある。成程世の中に規則正しく繰返さるゝと云ふ所得はないに相違ないのであるが、併し、その眞の意味は矢張り確實なる見込のあるといふことに在つたのであるから、此の議論は畢竟言葉の上

の争たるに過ぎぬのである。

## 第三節 所得の種類

さて所得はその見方によつて種々の區別が生ずるのであつて、第一は國民所得と個人所得との區別である。が、是れは國民所得とは、個人所得の總計である。又第二は名目所得と實質所得とであつて、實質所得とは所得の實物を謂ひ、名目所得とは貨幣に依つて言ひ表はされたる所得を謂ふので、例へば月百圓の所得と云ふが如きが即ち是れである。此の名義所得は實質所得と異つて、財の價格の高低に依つて實質上の所得に増減を來たすもので、同じ百圓の所得であつても、物價の高いときと安いときとに依つて、その所得を以て人の欲望を満足せしむる財の量に大なる差違があるのである。又第三は財産所得と勤勞所得との別で、財産所得とは財産より生ずるものであるが、勤勞所得とは人が働いて得るものであるから、是れは働かなければ得ることの出来ぬのに反し、財産所得は財産を有して居りさえすれば遊んで居つても得られるのである。それで同じ所得であつても、その所得の確實と云ふ程度に大なる差違があるのである。斯ういふ風であるから、所得税を課する場合にも、その率は財産所得に高く勤勞所得に低かるべきは當然であつて、我國に於ても、所得税法の中に此の區

別が採用せられて居る。又た第四は自由所得と非自由所得との區別で、自由所得とは所得の中から一切の生活費を差引いて尙ほ餘りのある所得を云ひ、その所得は自由勝手に之を處分することが出来る性質のものであるが、非自由所得とは生活費を辨ずるために如何してもその方に使はねばならぬので、勝手に處分することの出来ぬ所のものである。

#### 第四節 所得と收入

次に所得 (Einkommen) と云ふ語に對して收入 (Einkünfte) と云ふ語があるが、收入は所得より更らに廣い意味を有し、相続、贈與、富籤等をも其の中に包括して居るのである。尙ほまた收穫 (Ertrag) と云ふ語があつて、この語はその起りが自然の果實に對するものである如く、或る特別なる源泉より得る所得を指すのである。

所得の意義は以上に述べた如くである。曾ては此の所得を私經濟の見地に偏して見るの憾みがあつたが、現今では、一般經濟の上から大なる注意を拂ふべきもので、到底さういふ偏見を許さないものである。何となればその所得が果して如何に分配せらるゝか、換言すればその分配が公平であるか否かと云ふことは、社會の進歩に重大なる關係を有するからである。この分配のことを全く極端なる自由

主義に放任し、優勝劣敗は自然の勢であるとして一切等閑に附して置くならば、貧富の懸隔は益々甚だしくなつて、其の極、富者は益々富みて悠々安逸を事とし、貧者は益々貧しく失望の餘り自暴自棄に陥るやうになり、社會の進歩は遂に得て望む可からざることになるのである。併しながら分配は公平に行はなければならぬからとて、財産を平等に分配する如きは之れ又た考へもので、現今分配のことは大に世人の論議するところになつて居るが、物は總て極端に走れば必ず其の弊を生ずるものであるから、分配の問題の如きも、決して極端なる方法に依るべきではなく、此の問題の解決の如きも序々に進まなければならぬのである。即ち現在の社會に存して居る長所は之を保存し、短所は之を補ふやうにして、以て社會の健全圓滿なる進歩を圖るのが極めて大切であるのである。

さて是より進んで所得の分配と云ふことを説明しやうと思ふのであるが、今や所得は分配上更らに左の四種に細別せられて居るのである。即ち土地に對する所得たる地代、勞力に對する所得たる賃銀、資本に對する所得たる利子、及び企業に對する所得たる利潤、是れである。尤も英國の舊い經濟學者は借地人に標準を置いて分配を論じ、借地人は自ら資本を持つて居る者としたから、利潤と利子とを全然混同し、隨つて所得を三種に區別したのである。併し之は謬見であつて、例へば農業にせよ、工業にせよ、事業家が自ら資本を持たないで、他人の資本を借りて事業を經營すると云ふことは、寧ろそ



## 第二節 リカードの地代説

素よりリカード以前の學者にありても、地代のことを説明した者は一人や二人に止つた譯ではなく従つて地代に關する理論も決してリカード自身の獨創の見解であるといふのではないが、何分にもリカードは英國經濟學者の權威であるし、又た其の地代説は最も明瞭で、且つ詳細を極めたものであつたから、地代の法則は全くリカードの創見にかゝる如くに信ぜらるゝ様になつたのである。斯様の次第であるから、地代を説明するには、先づリカードの所説を紹介するのが便利であるのである。依つて今其の梗概を述べて見れば、土地には元來天然自然の儘にて尙ほ且つ其の地味に優劣の差があるのみではなく、又た其の土地の位置にも便否の差がある。されば土地に優劣便否の差があるとすれば、必ず其の土地の自然的生産力にも大小の差を生じ、既に自然的生産力に大小の差が生ずるとすれば、土地には上田、中田、下田の區別を生ずるのである。然るに今若し社會が尙ほ幼稚で、十分の發達をすることもなく、人口が稀少であると云ふことであれば、其の稀少なる人口は食料品其の他の物を要することも僅かであるから、人は到る處に上田を得て自由勝手に之を耕作し、誰も土地を耕作するが爲めに其の土地に對して報償をなす者はない筈である。併しながら人口が次第に増加して來ることに

なれば、食料品を要することが多くなり、食料品を要することが多くなれば、今迄の如く上田のみを耕作して居つては、到底其の増加した需要を充たすことが出來なくなるから、勢ひ上田の次なる中田を耕し、それでも尙ほ人口が増加して食料品の需要が増加し、其の價格が高くなれば、更に下田を耕し、漸次、同じ資本と努力とを加へても、其の收穫の割合少なき下等の土地をも、だん／＼耕作せねばならなくなるのである。是れは同じ土地に資本と努力とを加ふるに應じて、同じ割合で其の收穫が得らるるならば、何も中田や下田を耕作する必要はないのであるが、土地には報酬漸減の法則が行はれて、同じ上田に今迄の資本努力の二倍或は三倍を投じても、其の收穫は二倍或は三倍と云ふ割合で増加するものではなく、却つて其の二倍或は三倍の資本や努力を中田に入れた方が利益で、中田からは上田の收穫の減するよりも以上の收穫が得られるか、或は少なくとも、上田と同様の割合で收穫を得ることが出来るのであるから、自然そう云ふ風になるのである。それで、斯く人口の増加と共に、自然的生産力の互に異なる土地を同時に耕作せねばならなくなり、而して上田は中田より中田は下田より其の收穫が多いのであるから、此の上田や中田から餘分に得る所の收穫が茲に地代と云ふものになるのである。と云ふのが先づリカードの説の大要である。

尙ほ詳しく言へば、下田を耕すやうになるのは、地味に優劣があり、また土地に報酬漸減の法則が



行はれるからで、人口が増加して食料品に對する需要が増加しても、同一の土地を耕して其れに必要なとする資本や勞力に従前と同様なる報酬を與ふことが出来、食料品はいくらでも生産し得るといふことであれば別に悪い土地を耕す必要はない。然るに土地には報酬漸減の法則が行はれるから、これ等の食料品を土地が優良でも、悉く同一の優良なる土地のみを耕しては利益が少なくなる、それで勢ひ中田下田を耕作しなければならぬことになるので、食料品の需要が増せば、其の價格も騰貴するから、割合上生産費の高い下田の耕作をしても、割に合ふことになるのである。かくして土地は上田より中田、中田より下田と漸次劣等なものを耕すことになるのであつて、現に耕作されて居る最下等の土地は之を稱して耕境(Margin of Cultivation)と云ふのである。即ち耕境に在る土地は、其の生産物が其の生産費を償ふだけで全く餘りの無いもので、生産費を償うて剩餘を見るのは、耕境以上の土地である。而して土地が優等になればなる程、此の剩餘の多いのは勿論であるが、此の剩餘が即ち地代となるのである。

されば、人口の増加するに伴れて食料品の價格は高くなり、食料品が高くなるから耕境が下り、耕境が下るから地代が増加するのであつて、更らに一層進んで言へば、食料品の高くなる結果として、地代が騰貴するのである。即ち地代が高いから食料品が高いのではなく、人口が増加すれば食料品が

高くなり、随つて地代が高くなるのである。さうしてこれは土地には限りがあるからである。

斯の如く觀來るときは、地代は騰貴する一方であるやうであるが、併しまた一方には地代を低減せしめんとする他の勢力もある。其の第一は農業上に於ける技術の進歩である。即ち學術の發達と共に種々なる新技術が農業に應用せられ、耕作の改良を促し其の收穫を増加せしめるのであるから、從來よりも食料品の供給を多くし、土地の耕境は之が爲めに降下することなく、或る場合には却つて之を高め、以て地代を低減せしめることもある。又第二は交通機關の發達であつて、交通機關が發達すれば、從來人の放棄して顧みなかつた不便の土地も耕作せらるゝやうになるし、また運賃が減るかから、遠隔の地方から農産物を得ることも出来るやうになつて、これまた食料品の供給を多くし、耕境を降下せしめず、却つて地代を低減せしむる結果となるのである。その著しい例は、海上の運輸機關の發達で、一時歐洲諸國は人口の増加と共に耕境が次第に降下し、食料品が高くなつて來たので、非常に之を憂へたのであるが、交通機關の發達するや、亞米利加、亞弗利加等の地方より農産物を輸入することが出来るやうになり、これが爲め耕境も下らず、地代は交通機關の爲めに少なくとも一時増加せぬやうになり、或る處では低減するやうになつたのである。併し交通機關の發達は、或る場合に於ては却つて地代を高くすることとなるのであつて、今述べた例に見ても、亞米利加なり亞弗利加な

りに於ては、交通機關の發達に依つて農産物を歐洲諸國に輸出することになつたから、従前よりも多く農産物を生産し、隨つて或る程度に達するまでは、従前よりも多くの土地を耕作し、其の結果として、地代の高くなる傾向を示したのである。否、交通機關の發達が却つて地代を騰貴せしむる場合は、單に國際間に於て見るのみならず、其の行はれる範圍は素より狭いが、一國內に於ても屢々見る所の現象であるのである。

### 第三節 リカードの説に對する非難及修正

以上はリカードの説に基いて地代を説明したのであるが、此の説に對しては、種々なる非難攻撃を試むるものがあつた。また學者の中にはリカードの説を或る程度まで修正して地代の説明をしやうとする者もある。先づリカードの説を非難した主なる者を擧げて見れば、土地には巨額の資本勞力が加へられて居つて、土地に生産力があるといふのは、此の投下せられた資本勞力があるからである。それ故、地代とは此の資本勞力の投下に對する報酬であつて、此の報酬を外にして別に地代といふものはない」と云ふて居る者がある。併し此の説は見當違ひである。何故かと言ふと、成程現今の土地には少なからず資本勞力が加へられて居るが、併し土地に何等の人力をも加へず、全く自然の儘で置い

ても、尙ほ且つ生産力を有して居ることは、拒むことの出来ぬ事實であるからである。また我が日本の東京、大阪等の大都會に於ける地代騰貴の有様を見れば、地代はドシ／＼騰貴してゐるが、此等都會の土地には、何等の資本も勞力も投ぜられて居らぬ處が多いではないか。次にはリカードは、「土地の耕作は先づ上田に初まりそれより漸次中田下田と下の方に及んで來たのである」と説いて居るが、却つて土地の耕作は「下田に初つて漸次上田に及ぶものである」といふものもある。それで、其理由として「人類が初めて無主の土地を耕さうとした時には、上田には葦や菰の類が多く繁茂してゐたし、また上田は多く沼澤の地で、此處には猛獸毒蛇が棲んで居つて極めて危険であつたし、また衛生上から言つても危険が多つた。それ故人は此の種の土地を避け、地味は悪いが最も耕作に容易で危険の少ない高原の地に去り、此處に住まつて附近の地を耕し始めたに相違ない。隨つて、事實はリカードの唱ふる所と全く反對である」と。乍併、此の反對説もまた考へ違ひである。蓋し此の説は、亞米利加の事情を基礎として説を立てたのであらうが、土地の良否を決するに、單に其の肥瘠といふことだけを見て、其の位置といふことを看過して居る。それ故、上田若しくは下田なる語の意味は、リカードの言ふ所のそれとは大に違つて居るのである。抑も土地の良否を決するには、其の肥瘠といふことは素より有力なる條件であるに相違ないが、併し其の位置といふことを疎外しては、到底正確を期する

ことは出来ないのである。何となれば、土地が如何に豊饒であつても、其の位置が非常に不便であつては、第一耕作することが出来ないであつて、耕作の出来ないやうな土地は、之を稱して上田と爲すことの出来ないのは、看易き道理であるからである。而して此の位置といふことは、その當時の社會の事情と緊切な關係を有して居るから、土地の良否は一方その當時の社會の事情に鑑みて判断するのを要するのである。斯う云ふ風に見て來ると、右の説の所謂上田は、實は下田であつて、其の所謂下田は却つて上田であつたのである。従つて矢張り土地は上田より下田に移るといふことになり、其の反對説は根柢より崩れて了ふのである。因みに曰ふ、土地の位置といふことは、獨逸のチューネンといふ學者が非常に重きを置いて説明したことであつて、世間では、リカードは此の位置に就いては十分に觀察しなかつたと云ふて非難して居るが、チューネン以前に在つては、リカードが最も之に注意して居たのである。

更らにまた地代に關して一派の議論がある。即ち此の説に依ると、「地代は特別に地味が豊饒で又た地位が便利であるものに先づ生ずるものである。隨つて地代は此の特別な性質、換言すれば獨占的の性質より生ずるものである。それ故、リカードの地代の概念を推し廣めるの必要がある」と云ふのであつて、最近に及び、リカードの地代説に修正を加へるものがあるのである。それで、これ等の

議論に依れば、「報酬漸減といふことは、單に土地にのみ限るものではなく、如何なるものでも此の法則は働くものであるから、報酬の漸減とは、畢竟するに其のものに能力上の制限がある場合に起る現象である。然るに如何なるものにも、能力上の制限はあるのであるから、或る程度の報酬漸減は、何物にも行はれる筈である。隨つて地代は土地に限らず、苟くも特別な利益を有するならば、如何なるものよりも生ずるものである」と云ふのである。惟ふに此の修正説は、土地の獨占的性質と云ふことに重きを置くものであつて、此の獨占的性質は、また土地の有限といふことを意味することになるのである。即ち眞に地表に在る土地は、無限のものではないのである。然して此の説は、能く理論の一貫せるものであつて、地代の觀念を説明して頗る明快なるものであらう。

#### 第四節 土地單稅論

地代は以上説明する如くであるが、今や土地は私有財産權の目的物となり、此の財産權を有して居る者は、即ち地主である。處が此の土地の私有といふことに就いては、種々なる議論があつて、一體地主なる階級は、人口の増加、社會の進歩と共に、其の所有する土地の地價、地代共に騰貴する一方であるから、自らは手を懐にして遊んで居ても、其の所得は激増して行くものである。隨つて地價、

地代の騰貴より生ずる利益は、地主をして之を收得せしめず、宜しく社會に於て收得すべきである。即ち國家に之を沒收するが至當であると主張するものがあるのである。

それで、此の種の議論の中で最も著明なものは、土地單稅論であるから、これに就いて少しく述べると、其の論旨は斯うである。「元來土地は人類が共有すべき筈のものであるのに、之を私有せしむることになつたから、貧富の懸隔が生じて來たのである。されば社會を改良し、貧富の懸隔を矯正して住み心地よきものたらしむるには、其の禍源を絶たなければならぬ。而して禍源は素より土地に在るのであるから、土地より生ずる地代は個人をして勝手に之を收得せしむることなく、宜しく國家に於て地租として全部徴收すべきである。斯くすれば人口が増加し社會が益々進歩すれば、此の地代も亦之に伴ふて益々増加するから、之れを租稅として徴收すれば、國家は他の稅源に依らずとも、全く此の地租のみを以て一切の政費を支辨して行くことが出来るであらう。さすれば現今の如く種々なる稅目を設けて課稅するの必要なく、隨つて一國々民の納稅上の負擔も大に輕減することが出来る。」と斯く云ふのである。

然るに此の説は、其の主意とする所は別に難すべき點がなく、現に土地には地租が課せられて居るが、併し社會の自然的產物は獨り地代にのみ限らるゝ譯のものではなく、かの公債株式券の如きも、

其の相場の騰貴は、地代の場合に於けると同じく其の所有者の働きではなく、自然の増加である。それだのに獨り其の銳鋒を地代にのみ向けるのは、心得難きことである。且つ又た論者の言ふ所は、實行上極めて大なる困難が伴ふのである。と云ふのは、地代の計算は頗る困難なるものであつて、實際純粹の地代といふものは極めて少なく、大抵の場合は、地代と云つても其の中に他の所得が混和して居るのである。又地主は屢々代ることもある。従つて土地單稅の實行はさう簡單なものではないのである。

#### 第五節 土地國有論

土地單稅論は其の主意に於ては可なりであるが、上述の如く種々なる點に於て缺點があるから、茲に始めて土地國有論が起つて來るのである。即ち英國の碩學スペンサーの如きも、土地國有の意見を抱いて居つたのである。而して土地國有論者が國有を主張する理由は、土地單稅論者のそれと相似たもので、「土地より生ずる利益は自然的に社會に生じて來るもので、是は自然的價値の増加、即ち儲けられざる利益 (Unearned Increment) と稱すべきものであるから、獨り地主をして之を壟斷せしむるが如きは許すべきことでなく、宜しく國家に於て全部之れを收得すべきである」と云ふのである。

唯だ土地國有論は、土地單稅論の如く之を收得するに租稅徵收の形式に依るが如き姑息なる方法を探らずに、斷然土地を國有にして了へと主張するのである。

然るに此の議論も亦た實行上甚だ困難であるのである。即ち土地は今日既に私有になつて居るから、之れを國有にするのには一切之れを買上げねばならぬ。然るときはそれが爲めに國家は大なる財政上の支出をしなければならぬ。國債でも募集すれば、買上げの出来ないこともあるまいが、併し、國債の利子支拂が一の大きな問題になつて来るから、旁々其の實行は容易に望まれないのである。且つ又た假りに國有にしたとしても、其の曉に十分土地の改良が望まれやうかと言ふに、個人の利己心に委して置く時ほどの改良は、到底望まれないに相違ないのである。尙ほまた土地より生ずる利益は、地主に於て之れを收得するといふものでもないのである。されば土地より生ずる利益は、其の限り或る程度までは占めて居るといふものである。要するに土地國有論も、實行極めて困難なる議論で、土地は寧ろ現状の儘にして置いても、唯だ其の兼併を防ぎ、成る可く之れを小分して所有せしめ、儲けられざる利益は之れを租稅として國家に納付せしむる方針に出るのが萬全の策であらうと思はれるのである。

### 第三章 賃 銀

#### 第一節 賃銀の意義

賃銀 (Wage) とは、人の労働に對する報酬である。而して人が労働して報酬を得るのには、自己の仕事に従事して報酬を得る場合と、他人に傭はれて報酬を得る場合との二があるが、自己の仕事に従事して労働する場合には、仕事の成否如何に依つて報酬の得られぬこともあるから、仕事に對する危険が包まれて居つて、此の場合の報酬は、純粹の賃銀の外に企業家の利潤も含んで居る。けれども、他人に傭はれて労働する場合の報酬は全然賃銀である。而して賃銀の主なるものは、第二の場合即ち他人に傭はれて労働する場合の報酬である。但し第二の場合の賃銀にも種々なる種別があつて、其の定まる法則もまた種々異つて居るのである。例へば、官吏の俸給、醫師辯護士若しくは公證人の報酬の如きは、必らずしも經濟上の法則に依つて定まるものではなく、官吏の俸給の如きは、其の地位身分に依つて定まり、勞力の需要供給とは概して直接の關係のないものである。又た醫師、辯護士の如

きは其の報酬は之れを謝禮と稱し、これ亦た其の勞力の需要供給に依つて直接に定まるものではなく、多くの場合慣習などの勢力が非常に重きを爲すものである。而して官吏、醫師、辯護士等の勞働は多く精神的の勞働であるが、之れに反し、人に備はれて肉體上の勞働をする所謂勞働者の得る報酬は、純粹の賃銀で、こゝにも習慣の勢力が多少認められないではないが、併し此の種の賃銀の定まる主な原因は、經濟上の法則即ち需要供給の法則であつて、是が即ち狹義の賃銀である。

今日の産業機構に於て謂ふ所の勞働者は、唯だ勞力のみ依つて衣食し、殆ど何等資本の力をも借ることの出来ぬ有様である。それ故勞力は恰も商品の如く取扱はれ商品と同じく賣買せられて居る。併しながら勞力は人と離る可らざる關係を有して居るもので、無論人を離れて勞力は存在しないのである。それ故勞力は國民全體延いては人類全體に對して甚だ重要な關係を有するものである。こゝに論ぜんとする賃銀は、主として狹義の賃銀に關してである。

## 第二節 賃銀の種別

賃銀の種類を挙げると、第一は貨幣賃銀と實物賃銀とであつて、貨幣賃銀は名目賃銀 (Nominal Wage) とも云ふのである。處で此の貨幣賃銀は、貨幣の價値の變動に依つて實質上の賃銀を異にし、

例へば、同じ、二圓の賃銀でも、米一升八十錢の時と一圓の時とは、勞働者の生計に大なる差違を生ずるのである。又た各國間の賃銀の比較をするにしても、唯だ名義上の賃銀を比較しただけでは、各國貨幣の價値は同様でないから、決して正確を期することは出来ないのである。次に實物賃銀とは、衣食住に必要な實物を以て賃銀の支拂に充つるものであつて、今日支拂は大抵貨幣を以てし、實物を以てすることは漸次其の跡を絶たんとして居るけれども、極めて邊鄙の田舎に行けば、まだ實物を以て支拂をすることが行はれて居るのである。又た田舎でなくとも、一部分補助的の賃銀として實物の支拂をする例は、諸所に行はれて居るのである。かの丁稚、女中の仕着の如きは、即ちそれである。それで實物賃銀は貨幣の變動に伴ふ影響を受けることはないが、賃銀を得たものは實物を消費するのであるから、自由に自分の欲する所のものを得ることが出来ず、随つて多少獨立自由を妨げられるのである。又た工場などで實物賃銀を支拂ふことになれば、それは、トラツクシステム (Truck System) で、職工は悪い品物を高い割合で支拂はれることにならぬでもなく、さうなれば詰り賃銀を減少せしめらるると同じ結果になるから、各國の工場法などは、概ね之を禁じて居るのである。

第二は時間拂賃銀と出來高拂賃銀とである。時間拂賃銀とは、一日とか一週とか云ふが如く時間を標準として支拂ふ賃銀であつて、これは甚だ簡單な方法である。併し此の方法に依ると、勉めても、

惰けても、チャンと極つただけの賃銀を得ることが出来る所から、自然労働者をして怠慢に陥らしむる弊があるのである。併し一長一短で、此の方法によると、品質の優等なものを作ることが出来るのである。次に出来高拂賃銀とは請負ともいひ、仕事の出来高に應じて、賃銀を支拂ふのであつて、此の方法には、前の時間拂賃銀の方法と正反對の長所と短所を有して居るのである。即ち此の方法は仕事を多くすればする程賃銀が多くなるから、労働者をして勤勉ならしむる長所はあるが、粗製濫造の弊が行はれるのである。尙ほ又た労働者は賃銀が得たさに過度の労働をして、健康を害する危険があるのである。かく時間拂と出来高拂とは、互に相反する長所と短所とを有して居るのである。其の何れを採用すべきかは、仕事の性質に依つて極めなければならぬので、労働の結果を正確に計算することの出来ぬものは出来高拂を採用することの出来ぬのは勿論である。

第三は賞與で、大に勉強を促すとか、非常に佳い物を造るとか、出来高が多いとか云ふが如き特別な労働に對して特別な報酬を與ふるもので、労働者の勤勉貯蓄を奨励する一方法である。此の方法は、時間拂賃銀を採用したときにそれと併用することにすれば好成績を得られると云はれる。

第四は利潤分配法である。此の方法は、事業の利益が多く擧がれば賃銀を多く拂ふといふことにするもので、事業の利益の多く擧がるのは、労働者が精勵した結果であると云ふ點に基礎を置くのであ

るが、實際に於ては、事業の利益は、労働者の勤勉如何といふことよりも、その當時の一般經濟界の狀況、企業家の手腕如何と云ふことに依る方が大であるから、此の方法は餘り褒むべきものではないのである。殊に労働者は企業に關する知識が乏しいから、分配の多いときは喜ぶが、少ないときは不平を言ふに相違なく、其の不平を鎮め様とするには事業の狀況を一々明白に説明して成程と會得の出来るやうにして遣らなければならぬので、労働者をして徒らに事業に容喙せしめ又た事業の秘密も保てなくなるのである。

第五は滑準法 (Sliding Scale) である。此の方法は、生産物の價格の高低に依つて或は賃銀を増加し、或は賃銀を減少する方法で、此の方法の説明としては、既に利潤分配法の所で述べた所のもの、一部が當て嵌まるのである。それ故委しく述ぶる必要はないのであるが、唯だ此の方法は價格高低の標準を定むることが甚だ困難で、到底正確に計算することが出来ないから、石炭の採掘の如き單純なる事業に應用せらるゝに過ぎないのである。

第六は共同生産法である。此の方法は、企業家と等しく労働者も亦其の事業の爲めに一部の出資をして、企業家と労働者と共同して事業を經營する仕組みである。従て此の方法は賃銀の支拂方法といふよりも、寧ろ經營方法といふべきである。併しそれは兎に角此の方法は大に效果的だとは云へない

のである。其の理由は、第一に労働者は多く賃銀に依つて生活して居るもので、事業に出資をする様な余裕のあるものは極めて少なく、次に又た企業である以上は、損失の危険が伴ふものと見なければならぬから、労働者は此の危険を恐れて容易に手を出さず、従つて此の方法は廣く行はるゝに至らぬからである。

### 第三節 賃銀の決定

勞力は實際上恰も一種の財の如く見做さる。併し勞力は他の財とは大に其の性質を異にして居るのである。即ち官吏の月給とか、醫者や辯護士の謝禮とか云ふ如きものは、勞力に對する所得であつても、威嚴を保つが爲めとか、或は習慣の勢力等にて、單純に需要供給の原則によつて定めることの出来ぬものもあるし、又た、たとへ是等は別とするも、經濟財は之を生産するに生産費を要し、企業家は之を生産して市場に持出し販賣して、之に投じた資本を回収し、尙ほ之に依つて利潤を得るのであるが、勞力の方は、人間と別々に離すことは出来ぬものであつて、別に資本を投ずるといふこともなく、且つ勞力を有する者が企業家であるといふ理由もなく、勞力を有する者は、唯だ其の勞力に依つて得る賃銀を以て生活をして行くといふだけであるから、勞力は他の財と全く同一視することとは出来ないのである。左に勞力の價、即ち賃銀は如何なる法則に依つて決定せらるゝかを説明しよう。

抑も如何なる事業に在つても、労働者が備はるゝ場合に、其の賃銀の額は、労働者の提供した勞力に依つて得られる収入、他の語を以て言へば、労働者の勞力を以て生産した結果以上に上ることは、企業家の利益を無くすることになるから、決して出来るものではないのである。それ故賃銀の最大限といふものは、其の生産した結果が即ちそれである。次に賃銀の最小限は如何にと見れば、労働者が生活する爲めに絶對的に必要な費用であつて、是れは恰も經濟財の場合に於ける生産費の如く、普通の場合に經濟財は其の生産費以下に價の下るものではないが、賃銀も如何に下つても此費用以下に下ることはないのである。尤も此等のことは、個々の労働者に就て云ふのではなく、労働者全體の階級を通じてのことである。斯く賃銀には大體上、其の最大・最小の二個の限度があつて、實際上の賃銀は、此の限度の範圍内に於て極まるのである。因みに曰ふ「絶對的に必要な費用」とは、其れだけの費用が無くては、労働者が事實生活が出来ぬ所のものであるが、實際に於ては、生活の標準は、場處と時代との如何に依つて多く習慣的に定まつて居つて、此の習慣的生活の標準を労働者は固く維持せんとするものである。それで之は普通には絶對的に必要な費用以上になつて居るのである。



次に右の範囲内に於て賃銀の額を決する最も有力な勢力は、矢張り彼の需要供給の關係である。即ち人口増加の割合よりも資本増加の割合が大であるか、或は經濟界が好況であつて諸種の事業が盛んに興れば、賃銀は高くなり、之と反對の場合には、賃銀の下落するのは、一に皆勞力に對する需要供給の關係に基くものである。尙ほまた需要の側なり供給の側なり、其の何れたるを問はず競争が起れば、其の競争は其の強弱の程度に隨つて、賃銀に影響するものであつて、若し勞働者が個々に分立して備主に對抗すれば、勞働者は普通、賃銀に依つて生活し、一旦賃銀が取れなくなれば、生活することが出来なくなるから、備主の屈服する所となつて、如何なる不利益をも忍ばなければならぬことになり、其の賃銀は低減せしめられるのである。然るに若し之に反して勞働者が勞働組合を組織し、一致團結して備主に對抗すれば、逆に備主を屈服せしめることが出来ぬでもなく、此の時は賃銀を高めることが出来るのである。併しながら、また備主の側に在つても、共同一致して勞働者に當ることになれば、勞働者側の勢力を殺ぎ賃銀は其の割合に上らないのである。

又た賃銀の高低を來す原因には、一般的原因と特別の原因とがあつて、以上に述べた所は一般的原因に基くものであるが、特別の原因に基く場合を例示すれば、之を二に區別することが出来るのである。即ち其の第一は特別なる勞働者の階級に關するもので、國際競争とか、産業技術の進歩とか、

貿易政策とかいふことによつて、其の種の産業に盛衰を來すことがあれば、それによつて其の産業に従事する勞働者の賃銀は少くとも一時高低するのである。又た第二は個々の勞働者に關するものであつて、之れは仕事に熟練を要する勞働は熟練を要せざる所謂「不熟練勞働」よりも、不快なる仕事は愉快なる仕事よりも、間斷ある仕事は規則的に年中休みなく繼續する仕事よりも、危険なる仕事は危険ならざる仕事よりも、中途轉業の困難なる仕事は其の易きものよりも、また信用を要する仕事は之を要せざる仕事よりも、其の賃銀は一般に高いものである。

最後に又、こゝに一言して置きたいのは、賃銀が高いとか安いとか云ふことは、單に名目上の賃銀のみを見たゞけでは判斷することが出来ないと云ふことである。何故かと言ふと、貨幣の價值は動搖するものであるから、單に名目上の賃銀のみを見たゞけでは、時を異にし場所を異にする賃銀を正確に判斷し、比較することの困難であると言ふまでもなく、又た如何に高い賃銀を拂つても、その勞力の効果が大きければ、結局勞力の價は安いことになるし、之に反して名目上の賃銀は如何に安くあつても、其の勞力の効果が小さければ、これまた勞力の價は結局高いことになるからである。それ故賃銀の高低を正確に知らんと欲すれば、勞働能率 (Efficiency of Labour) 如何といふことを考量しなければならぬのであつて、多くの學者の研究に依れば、名目上の賃銀の高い勞力は、其の安いものに比

すれば、勞力の能率が一般に大であると云ふことである。果して然らば高い賃銀は却つて安く、安い賃銀は却つて高いと云ふことになるのである。

#### 第四節 賃銀の鐵則

賃銀の問題に關しては、古來種々なる學説があつて「賃銀は勞働者の生活費以下に下るものではない」と考へたのであるが、其の最も著しいもの、一はリカードの唱へた所のものである。即ち其の大意は賃銀の平準は、恰も財の價格が其の生産費に依つて極るが如く、勞働者が生活の爲めに必要とする最小限度の費用に依つて、極まるものであると云ふのである。それで、リカードの考では「若し實際拂はるゝ賃銀がその平準より高ければ、勞働者は深い考がないから、之を以て生活状態を向上し改善するといふ方に努めるよりも、早く結婚を急ぐこととなり、其の結果早婚者の數が俄かに殖えて行き、出産數も之に伴ふて増加するから、勞力の供給が過大になり、やがて再び賃銀を下落せしめるものである。それ故、賃銀は決して其の平準を久しく超過することは出来ぬものであるが、併しまた平準以下に下ることも出来ぬものであつて、若し平準以下に下れば勞働者は最早生活することが出来ないから、勞力の供給が減り、従つて賃銀は再び上つて前の平準に復することになると云ふのである。

リカードの此の説は、當時直ちに實際に應用せられ、勞働者が賃銀の引上を僱主に逼る等のことがあれば、僱主はリカードの説を楯に取り、「勞働者は折角賃銀を引上げて、早婚をして出産數を殖やし、直に賃銀を下落せしめるから、賃銀を増しても何等の效がない。勞働者の貧困に苦しむのは致し方がないのだ。眞に賃銀を高めんとするなら結婚をせぬがよい。然らざれば賃銀を増しても無駄だと主張し、勞働者の賃銀引上の要求を峻拒する口實としたのである。否、或る者はリカードの説を基礎として社會機構を批評し、次の如く言ふたのである。「若し勞働者の賃銀がその生活の爲めに必要な最小限度の費用以上に上ることが出来ぬとすれば、勞働者は未來永劫其の貧窮なる生活状態より離脱することの出来ぬことになる。悲惨と云ふの外はない。畢竟するにこれは社會機構に缺陷があるからである」と。で、ラサールの如きも、リカードの此の説に「賃銀の鐵則」(Iron Law)と云ふ名をこへ付けた程である。併しながらリカードの説はさう極端なものでなく、彼れ自らは實際上の賃銀が平準以上にあることを認めて居つたのであつて、それを若し右に述ぶるが如く極端に解すれば、其の誤つて居るのは勿論である。即ち賃銀が下落すれば、勞働者は餓死すると云ふけれども、餓死するなどのことは事實あり得べからざることであつて、假にさういふことがあるにしても、餓死する迄には、幾年かの月日を要するに相違なく、賃銀が下落したからとて、直ちに餓死することはないのである。其

の故は第一、賃銀が最小限の費用を破つて下落しても、何等かの方法で以て其の不足分を補充することも出来るし、また出産數が増加すれば勞力の供給を増加すると云ふけれども、勞働者の子孫は必ずしも皆勞働者になるといふ譯のものでもないから、出産數の増加に伴ふて勞力も亦た其の割合に増加するといふことは出来ぬのである。又た勞働者が餓死すれば勞力の供給が少なくなつて直ちに賃銀を騰貴せしむると言ふけれども、これとて必ずしも然りと云ふことは出来ぬのであつて、外國への移住といふことを考へて見れば、此の事は直ぐ分かるのである。尙ほ又た少しく高い賃銀を給すれば勞働者は早婚をして人口が直ちに増加すると言ふけれども、結婚をすればとて、出産制限の方法もあり、總べての人々が必ず子供を擧げるものといへぬし、又た縦合出産の數が増加しても、其れが勞力として社會に供給せらるゝまでには、出産後少なくとも十二年を要するのである。故に右の説に於て言ふが如く、賃銀は生活費の最小限度に依つて極まるといふことは、先づ實際有り得べからざることであると謂はねばならぬのである。

### 第五節 賃銀基金説

次に賃銀を全く數學的に定めやうとする説もあるけれども、これは姑らく措いて賃銀基金説に就い

て述べやう。勿論これも亦た賃銀を數學的に定めやうとするので、其の説く所は「一定の時、一定の場合には、賃銀はチャンと確定して居つて動かすことが出来ぬもので、勞働者が如何に之を高めようとしても、到底高めることは出来ぬ」と云ふのである。なぜかといふと、「社會には勞働に従事する者の員數が一定して居ると同時に、此の勞働者に對して支拂はるゝ資本も亦た一定して居つて、其の資本は即ち流動資本の一部で、賃銀基金 (Wage Fund) と云ふものである。それで此の賃銀基金を勞働者の數で除すれば、賃銀が出るのであるから、賃銀が高くなるには、勞働に従事するもの、數が減るか、若しくは賃銀基金の額が増加せなければならぬのである。従て、若し一部分の勞働者の賃銀が右の原因に依らずして高くなれば、他の勞働者の賃銀はそれだけ少なくならなければならぬ」のだと云ふのである。此の説は、資本を企業家即ち私經濟の見地より見るものとすれば、多少の眞理はあるのであるが、併し到底盡く信する譯には行かぬのである。其の故は第一、勞働者の數と賃銀として拂はるる金額とを見て、それが社會に一定して居ると云ふのであるけれども、決して初めより一定して居るのではなく、又た賃銀として支拂はるゝ資本が存在して居つて、それが賃銀の額を定むると云ふけれども、實際はさうでなく、賃銀の額が定つて、而して後に一國の資本の中で、賃銀に充てらるる金額が定まるのである。又勞働者の數が賃銀を定むると云ふけれども、賃銀の高が却つて一國の人

口の中で労働に従事する者の数を定めるのであつて、此の説は事の本来を誤つて居るのである。且つ又た賃銀基金が初めより存在して居つて、賃銀は一に労働者の数に依つて定まるものであるとすれば、彼の労働者が労働組合を作つて資本家に對抗し、或はストライキを起して増給を逼るが如き企は、何等其の効果のなきものと云はねばならぬけれども、斯かる事は理に於ても、又實際に於ても有り得べからざる所である。

#### 第六節 賃銀と労働問題

要するに労働者は概して資産の餘裕がなく、一に自己の勞力に依頼して生活をして行くものであるから、生活に困つて來れば、如何に低廉な賃銀でも、之に甘んぜねばならなくなるのである。即ち労働者は競争上弱者の地位に在るものであるから、自由に放任して置けば、労働者の不利は知るべきであつて、初めの自由はやがて不自由となり、平等は不平等となるの結果を生じ、一方には貧富の懸隔を益々甚だしからしむることとなるのである。然るに此の労働者の階級に屬するものは其の数が甚だ多く、一國民の大多數は實に労働者が占めて居るのであるから、労働者の境遇にして悲惨なる状態の下に在ることは實に社會全體の上より見て甚だ憂ふべきことである。そこで労働問題なるものが夙に

識者の間に唱へられ、之に伴ふて社會政策の必要が痛切に感ぜられつゝあるのである。自由放任主義は、決して労働問題を解決する所以ではなく、労働問題を解決するには、労働者をして先づ普通人間らしい生活の出来るやうにして而して漸次其の向上を來すやうにしなければならぬのであつて、此の目的を達するには二の方法があるのである。即ち其の第一は、労働者自ら自働的に爲すもので、第二は他働的のものである。自働的方法とは、労働者が自ら其の地位の向上に努力するをいひ、他働的方法とは主として國家が之に當るもので、例へば職業紹介所 (Labour Exchange) を設けて、一方に餘つて居る労働者を、他方に不足を感じて居る所に送つて、其の過不及を調節するとか、相互労働保險を設けて、疾病、老廢、災厄、失業等の保險をかけさすなど大に労働者の爲に利益を計ることである。労働保險は其の始め獨逸に於て最も廣く行はれ、國家も之に補助を與へて其の發達を助長したものである。其他國家が工場法の如きものを設けて、労働時間、工場設備、休業日、賃銀の支拂方法、子供婦人の労働等に就いて取締を爲すが如き、或は、賃銀の額も法律を以て最小限度を一定するが如きである。

之を要するに以上述べたるが如き諸種の方法に依つて労働者の生活状態を改善しやうとする者は、賃銀が高くなれば労働者の生活の標準も高まるだらうと云ふ所に基礎を置いて居るのであつて、リカ

「Dの「賃銀が高くなれば労働者は直ぐ結婚をして澤山の子供を拵へ労働の供給を増加せしむる」と言ふのは、大に其の趣きを異にして居るのである。それで生活の標準を高めるといふことは、非常に重要な點であつて、若し此のことが行はれなければ、如何なる方法を講じても、労働者階級の地位の改善は到底望まれないのである。但し生活の標準を高める事は、労働者の自覺に待つことの大なるは云ふまでもなく、此の自覺があれば、國富の増進に伴ふて労働者の地位は必ず改善せらるるものである。」

## 第四章 利 子

### 第一節 利子の意義

利子(Interest)には廣狹二様の意義があつて、廣義に解する利子は「資本に對する所得」と云ふことになり、狹義に解する利子は「貨幣を他に使用せしめて之より得る報酬」と云ふことになるのである。而して普通世間で云ふ所の利子は、狹義に解した利子であるが、廣義の利子に従へば、資本に對する所得であるから、他人に資本を貸付けて得る報酬の外に、自らの資本を使用して得る所得も利子の中に含まれることが出来るのである。併し自から資本を使用して得る所の利子は多くの場合、純然たる利子の外には利潤、時には賃銀をも包含するものである。又た他人に資本を使用せしむる場合でも、其の資本には使用財と消費財との二種があつて、家屋、機械、器具、衣服、什器の如き使用財は、それより得る所得は利子には相違ないが、これは貸借料(英語では地代と同じく Rent と云ふ)と稱せられ、其の中には純然たる利子の外に損料をも含んで居り、又た消費財例へば米鹽の如き

もの、貸付は、現今は殆ど行はるることなく、假令行はれても、之を貨幣に換算して勘定するのが普通の状態である。

次に狭義の利子にも、貨幣の貸し様には種々なる形式があるから、種々の呼稱があつて、「割引利子」「預金利子」「貸付利子」等の種類があるのである。尙ほ「貸付利子」と稱せられて居るものの中にも、「不動産抵當貸付利子」、「動産擔保貸付利子」と云ふものがあるのである。又た以上の外に「公債の利子」、「社債の利子」と云ふものもあつて、此等貸借の關係者は個人たることもあり、銀行會社の如き法人たることもあり、又た國家たることもあるのである。而して總べて此等の利子は、經濟の狀況と云ふことを外にしては、貸借期間の長短、關係者信用の厚薄、若しくは擔保品の有無併びに其の確否に依つて高低の差を生ずるのであるが、要は貸付に對する危険の大小といふことが根本の條件を爲すのである。即ち危険の大である場合は、利子は其の報償として必らず高く、之に反する場合は安いのである。而して危険の最も小なる場合は、永久の生命を有し信用の最も厚い國家に貸付をする場合であつて、國債に放資するが如きは即ち是である。隨つて國債の利子は、純粹の利子(Pure Interest)と見ることが出来ると思はれて居るのである。又た利子は之を現はすに一定期を通じ、百分率を以てすることになつて居つて、これが即ち利率である。一定期とは普通一年であるが、時には月、

週、若くは日を以てすることもあるのである。

## 第二節 利子に關する學說

利子を論ずるに當り何時でも議論のあるのは、利子を取ることに正當なりや否やと云ふ問題である。何故に斯かる議論が出るかと言ふに、舊約全書の中に利子を取ることを禁じてあるので、西洋の宗教家は利子を取るのを人困ませるものであるといふ考から、之を不當としたからである。それでアリストテレスの如きも、利子を取るのを以て不當とし、「資本は子を生まず」と云ふ點に其の理由を置いて居る。アリストテレスの此の主張は、當時の社會に在つては、一理あることで、當時人が金を借りるのは、之を以て生産に使用せんが爲めではなく、單に消費の爲めであつたから、自然利子を認めぬことに成つたのである。換言すれば生産信用でなく、消費信用であつたから、斯く考へたのである。更らに詳言すれば、生産信用ならば、借りた資本に利益が生ずるから、其の一部分を貸主に與へるといふことは別に不思議もないが、消費信用で借るものは何時も生活上困難な境遇に在るものであるから、その困つて居るものから、利子を取ると云ふのは、不當であるといふことになるのである。併し今日に於ては、事情が一變して居るから、アリストテレスの議論は最早當て嵌らぬのである。尙

ほ利子を取るのを以て不當となす論者の中には、利子を取るのを以て労働の結果を奪ふものであるとし、現今の社會機構を非難するものもある。併し經濟學上では、財の價格は一に倫理觀に依つて極まるものではなく、全く一の事實である如く、利子も亦た事實であつて、之を取るの當否は餘り經濟學の論すべき性質のものではないと思はれるのであるが、一方に斯く反對論が喧しい所から、經濟學も其の當否を論ぜねばならぬことになつて、之に關する學說も數多くあるし、且つ此等の學說は、同時に利子の起原を説明して居るのであるから、便宜の爲め其の主なるものを簡短に紹介して置かう。

先づ第一は制慾説であつて、是れは、シニオール及びミルの唱道した所のものである。即ち其の要點は「吾々には種々なる欲望があつて、資本は此等の欲望を制して貯めた所のものであるから、之を人に貸せば、此の制慾に對する報酬を得なければならぬ。此の報酬が即ち利子である」と云ふのである。併し此の説は却つて資本の起原の説明となつて、利子の説明になつて居らぬのである。又た其の所論にも撞着があつて、零細の金を貯めるものには、貯金は成程制慾であらうけれども、大資本家は別に慾を制さなくても、貯蓄が出来るのであるから、論旨の不徹底を免かれないのである。

第二は、労働説とも稱すべきもので、是れはマクロツクの唱道に係るものである。曰く「資本は労働の結果であつて隨つて利子も亦た労働の結果である。故に此等のものは悉く労働者の所得に歸すべ

きものである」と。成程資本は過去の労働の結果であるには相違なからうが、現在の資本即ち資本になつて了つたものは、最早労働ではないのである。且つ、假令資本が労働の結果として出来たものとしても、その労働に對しては、既に報酬を與へた筈であつて、労働は一度報酬を得ればそれで十分であるのに、一回の労働の結果が資本に附隨して、永久に報酬を受け得る権利があるとは、承認することの出来ぬ話である。又たシェーフレ、ワグナーなどは「資本を所有する者は労働をしないが、併し資本を集めて經濟上有用にして且つ必要な職能を盡して居るのである。之は如何なる世の中に於ても、必要な職能であるから、斯かる職能に對しては報酬の伴ふべきものであつて、利子とは、此の報酬を指して謂ふのである」と言つて居るが、併し是は利潤の説明にはならうが、利子の説明にはならぬのである。

第三はセルニエシー並にベン・バヴェルク等の説く所のものであつて、其の要に曰ふに「人は現在の財に對しては將來の財に對するよりも多くの價值を認めるものであるから、現在の資本を人に貸して將來受取るものとすれば、其の受取るべき財は、現在認むるほどの價值と同様になるまで餘分の價值が附加されて居らなくてはならぬ。即ち將來受取る財の全體は、現在人に貸す財の分量よりもより多くなつて居らなくてはならぬのであつて、この多くなつて居るだけの財に對する價值は、こゝに

謂ふ所の餘分の價值であつて、此餘分の價值が即ち利子である。従て利子とは現在と將來との時間の差より生ずる所のものである」と。斯く云ふのである。それで此の説は其の説き方は頗る巧妙で空にある三羽の鳥よりも手にある一羽の鳥といふ如くであるが、併し是れは嘗て高利が禁ぜられて居つた頃に爲替手形に對しては利子を許したるも、現在貸して將來返却させる貸金には利子を禁じたるがごときこともあつて、實際の事情と一致して居らない憾があるのである。即ち普通世間で金を貸す場合に就いて見るに、貸す方の人が現在の金に對して將來の金に對するよりも大なる價值を認めて居るといふ事は甚だ疑はしく、現金を有して居るものは、唯だ其金を貸せば、利子が取れるといふことを知つて居るからこれに大なる價值を認むると云ふ有様である。従つて地方は都會よりも利子が高く、現在と將來との差が大であるべき筈であるのに、地方に於ては都會よりも貯蓄が多いのは、是れは全く利子の觀念が薄いからである。又た將來は現在よりも不確實であるから所得が多くなければならぬと云ふのならば、是れは寧ろ危険に對する報償であつて、利子の問題ではないのである。且つ世間には金を貸して、その返却せられざらんことを希望して居るものもあるものであつて、公債所有者の如きは即ちそれである。即ち彼等は公債の償還に依つて現在金を得ることが出来るのであるが、却てそれを喜ばずに、永く其の繼續を希望して居るので、是れは明かに論者の説く所と一致して居らぬのである。

又、現在の財は將來の財よりも其の價值が大であつて、其の差は將來に於て増加されなければならぬといふのであるけれども、人は其の差を決して補完的增加とは心得ずに、之を以て所得なりと考へて居るのである。尙ほ又、將來の財が現在の財よりも大なる價值を有して居る場合があつて、例へば毛皮の如き燃料の如きものは、夏季に於ては不要品であるから、其の價值が少ないが來るべき嚴冬の候を待てば、其の價值が著しく増加するのである。要するに「時間の差と云ふことも、一の力であるには相違ないが、併し是れは從たる性質のもので、其の主たる力は別にあるのである。即ち之を借入れんとするものが、其の必要を認めて之に對して利子を支拂ふといふことがそれである。

それから最後にはセー、ロッシェル等の説く所の生産説であつて、「資本を使用すれば生産の効力は増大するが當然で、資本の乏しき時よりも資本の多い時には大なる生産を爲し得らるゝのは勿論、曾て生産の出來なかつたものでも、資本を得れば生産することが出来るのであつて、資本が生産に對して有する關係は極めて大なるものがあるのである。それで、資本を使用して得る生産の結果は、即ち利子を生ずるものである」と云ふのである。惟ふに此の説は利子を説明するに稍々適當なものであるが、併し資本が生産の中でも、商業とか銀行とかに用ひられたときには、如何に生産を増加したか、又た利子は生産に關係がなくても生ずるものであれば、これ等のことは、生産説を以てしては一寸説



明に困難であるのである。蓋し前にも述べた通り、資本に利子の生ずるのは、資本には所有權が認められて居つて、資本なしでは生産も出來ず、勞力も役に立たぬと云ふ有様であるのに、資本は凡ての生産に要せられるだけ十分でないからである。例へばこゝに人があつて家屋を建築したとすれば、他のものは、無斷で其の家に住居することは出來ないのであるが、それと同じく、貨幣にも所有者があつて、その貨幣を他人に貸せば、自らは之を利用する機會を失ふのであるから、その貨幣を借入れたものは、之に對して何等かの報酬を與へねばならぬのであつて、此の報酬が即ち利子であるのである。而して金を貸したものは、借りたものが、之を生産に使用しやうとも、消費に使用しやうとも、さういふことは一切問ふ所でないのである。

かく利子は、資本が生産に有效なものであつて之に所有權が認められるから生ずるものであるが、資本に所有權が認められるからとて、それで勞働者を雇入れる資本家が直ちに勞働者の生産の結果を搾取するといふ譯のものではなく、却つて勞働者が自ら器械を借入れる場合には、其の借料を拂はねばならず、苟くも借りる方が資本の效用を認めて他人のものを利用するのであるならば、之に報酬を與ふるのは當然のことであるといふ理由に基くのである。

### 第三節 利子の決定

利子の高低の定まるのは、資本に對する需要供給の關係に依るもので、需要に比して供給が多ければ、利子は安く、供給に比して需要が多ければ利子は高いのである。それ故、經濟界が上景氣で、資本を要することが大である場合には利子は騰貴し、資本が増加して之を需要するものが増加しなければ利子は下落の傾向を示すのである。又た經濟界が沈滞を極め、危険を冒して迄も、事業を起さうとする者が少なくなれば、利子は同じく下落するのである。又た利子が餘り安くなつて、資本を有するものが之を貸付けるよりも自ら之を以て事業を起さうとすることになれば、利子は却つて高くなる傾向を示すのである。併しながら利子は利潤に依つて限定せらるゝものであるから、高くなつても、或る限度を超えて高くなることはないのであつて、資本を借りて事業を營むものは、其の得る所の利潤以上に利子を拂ふ理由がないのである。即ち個々の事業に就いて見れば、利潤の大小に依つて利子の大小があるとは言へぬけれども、一國全體の上より概括して言へば、一般經濟の發達尙ほ幼稚な所では、爲すべき事業が甚だ多く資本が不足であるから利潤が多く、隨つて利子も高く、之れに反して、經濟の十分發達して居る所では、資本が多く事業が少ないから利潤が少なく、利子も亦安いのである。

## 第四節 高 利

世に高利と稱して高い利息を取ることを非難するものがあるばかりでなく、國家も亦法律を以て利子に制限を附して居つて、我國の如きも、明治十年以來布告を以て之に制限を設けて居るのである。されど此の高利を禁ずることは、其の主義に於ては素より不可なることはないのであるが、實際に其の效力を常に發揮せしむることは中々困難である。何故かといふに、其實は利子であつても、表面は利子といふ名目を附せず、手数料若しくは口錢等の名目を以て貸付金の中よりそれを差引いて法律の規定をくゞるからである。其れ故に其のことも禁止しなければならぬ。且つまた高利と云つても、果して幾何の利子を以て高利と爲すべきであるか、其の標準の決定に苦しまざるを得ない場合がある。例へば人から借金をして事業を営むときにも、其の事業から十割の利益が擧がるならば、四五割の利子を拂つても敢へて苦痛なことはないのであるから、此の場合は高利必ずしも之を拂ふものに苦痛はないのである。併しながら經濟の發達は低利を有利とするから高利は之を避け低金利を實現せしむるに向はねばならず、殊に、困難なる境遇に在るもの、若しくは經驗のないもの、虚に乗じて暴利を貪る場合の如きは禁止しなければならぬのである。

## 第五節 利子低減の傾向

さて最後に利子の一般的傾向を述べんに、利子は漸次下落する傾向を有して居るもので、此の傾向を誘致する主なる原因は、所得の増加、文化の進歩に伴ふ貯蓄心の發達、及び信用制度、交通機關の發達に基因する資本の増加である。尤も一方には又た利子の下落を妨げるものがあつて、例へば資本が夥しく不生産的に使用せらるゝとか、それだけでなくとも一般企業が大に發達するが如き場合がそれである。併し大勢は下落に傾いて居るのである。それで、此の利子の下落の傾向は如何なる影響を社會に及ぼすかと云ふに、概して好影響を及ぼすものである。尤も利子が下落すれば貯蓄心を殺ぎ、随つて資本の増加を妨ぐる場合もないではないが、併し一方より見れば利子の下落は却つて貯蓄心を盛んならしむる場合があるのである。と言ふのは、或る一定の收入を利子に依つて得んとするが如き場合には、利子が安ければ多くの貯蓄を必要とするからである。例へば利子に依つて年千圓の收入を得ようとするには、利率一割のときは一萬圓貯蓄すればそれで可かつたのであるのに、利子が下落して五分となつたならば、二萬圓の貯蓄をしなければならぬことになつて、それだけ貯蓄が勵まされるが如きものである。何れにせよ、利子の低下は事業の繁榮及び之に伴ふ貸銀の騰貴によつて良好なる效

第五編分 配  
果を生ずるものである。

欠

**MISSING**

きことがあつては之れを承認することが出来なくなるのである。

## 第六編 消費

### 第一章 消費

#### 第一節 消費の意義

人は生存するが爲めに財を生産し、之を交換し、之を分配し、而して最後に欲望充足の爲め之を消費する等、種々なる経済的行爲をなすものであつて、決して生産其の他の経済的行爲をなすが爲に生存するものではないのであるから、消費は経済の最終の目的であつて、同時に又た経済の出発点である。

抑も吾人は何ものをも創造することの出来ぬ如く、如何なる物質をも永久に滅失せしむることが出来ぬものであるから、消費と言つても、物質を滅失せしむると云ふ意味でないのは勿論である。然ら

ば消費の意義は果して如何と言ふに、先づ之を極く廣義に解すれば、經濟財の價値の消滅若しくは減少といふことになるのである。それで、此の意味に於ける消費は、更に之を分けて自然的消費、經濟的消費の二に區別しなければならぬのであつて、自然的消費と言ふのは、同じく經濟財の價値の消滅若しくは減少ではあるが、人が別に之を消費しようと思ひ的に消費するのではなく、全く自然の力か若しくは不幸なる出來事に依つて消費せらるゝものである。然るに經濟的消費は人が之を意識的に、即ち目的があつて財の價値を消滅せしめ若しくは減少せしむるもので、此の兩者は斯く明白に區別せらるゝが、兩者の間に何等の關係もないと云ふことは出來ないのである。何故かと言ふに、自然的消費も經濟的消費も共に生産に影響を及ぼし、又た人が意識的に經濟財を消費して居つても、其の間に火災、水難、落雷等の自然的、偶發的の出來事が生じて財の價値を消滅若しくは減少せしめ、兩者が同時に起る場合があるからである。自然的消費は斯く自然力若しくは偶然の出來事に起因するものではあるが、併し多くの場合を包括して觀察すると、其の發生には多少規則的な所があるから、之を豫見して其の發生に對し或る種の處置をすることも、亦た全然不可能ではないのであつて是れが即ち保險の方法の行はれる所以である。

消費を更に狹義に解すれば、曩きの自然的消費を除外し、單に經濟的消費のみを意味することにな

るのである。併し此の狹義の消費も尙ほ之を區別して二種と爲すことが出来るのであつて、其の一は技術的消費とも稱すべきものである。即ち一の生産をするのに石炭及び其の他の補助的材料並に機械を使用し、石炭及び機械が其の使用に依つて、其の價値を消滅若しくは減少するが如きものである。併し此の場合に於て石炭や機械は、其の價値を消滅若しくは減少しても、それだけの價値は更らに新しく生産された財の中に含まるゝものであつて、其の關係は恰も粗製品が生産に使用せられ、其の材料は消滅に歸せずして唯だ精製せられ、新たな生産物を形作ると同じである。従て此の際價値は其の使用に依つて全然消滅若しくは減少するのではなく、別に形を換へて他と結合して居るのであつて、之は私經濟から見ても、公經濟から見ても、同様であるのである。それで斯かる消費は經濟的消費であるけれども、こゝに所謂消費と謂ふのは、人の欲望を直接に満足させるが爲めに財が消費せらるゝ場合のみを謂ふのである。さればこゝに謂ふ消費とは、極めて狹義のものであると云ふことが分かるであらう。

それから此の消費に就いて、或人は、消費は人の生産力を増加するものであるから、之を經濟行爲の終極と見ないで、生産力の増加を計る一手段であるが如く謂ふけれども、是は誤つて居つて、斯かる思想は人を機械と同一視した奴隸制度の時代ならば、いざ知らず、今日に於ては何等論據のないも

のである。蓋し奴隷は恰も労働機械の如きものであつたけれども、今日自由なる人間は、生存が目的であつて、生産は手段たるに過ぎないのであるからである。

かやうに消費は總べての經濟的行爲の最後の目的を爲すものであるが、人の欲望は回歸的のものであるから、生産されたものが一度使用されて、之に依つて人の欲望を満足させると、人には更らに又た新しい欲望が生じて來て、新しい生産物を必要とすることになり、かくして國民經濟の活動を續けることになるのである。

次に消費を客觀的に觀察すれば、消費を以て唯だ財の有形的變化と解釋するのであるから、流行の變化があるとか、新發明があるとかして、今までの財が不用に歸したといふが如き場合には、財そのものに何等の變化なく、唯だ財の價値が減少したといふまで之を消費と見ることは出来ないのである。又た人の勤勞を以て欲望を満足せしめる場合の如きも、唯だ無形財を以てする享樂であつて、之に對して報酬を拂へばとて、私經濟の上より見て消費と云ふことは出来るが、之を客觀的に消費と稱することは出来ないのである。

生産と消費との途中に於て、生産の結果は分配せらるゝものであつて、其の分配が任意的であつても、又た強制的であつても、何れにしても分配は吾人の所得を定むるものである。此の所得は、また

吾人の消費を決定する主なる標準となるものであつて、所得が少なければ少ないほど消費を制限し、果は唯だ生活に必要な可からざる資料を消費するに止まることになるが、之に反して所得が多ければ、多きだけ種々なる欲望が起り、之を満足せしめるが爲めに又た種々なる消費をするもので、此の場合には流行、習慣、地位等の考へから、一時的、主觀的の欲望をさへ満足せしめることになるのである。又た之が少し程度を過ぐれば、所謂奢侈と稱するものになるのである。それで、現今の社會は奢侈の風が盛んであつて、人は餘り多くの所得のないにも拘らず、尙ほ外觀の體裁を飾るに汲々として多くの消費を爲すのであるから、其が不健全なる現象たるは言ふまでもないのであるが、之と反對に適當なる程度以下の消費は節儉、儉約で、其の極は吝嗇と稱するものになるのである。

## 第二節 消費の大小

客觀的消費の大小は勿論年々消費せらるゝ財の分量に依つて知ることが出来るのであるが、更らに又た人口一人に就き幾何と云ふが如く統計的に示すことも出来る筈である。而して生活に必要な資料の消費額を知るは、甚だ有用の事であつて、殊に此の消費額は、社會の大部分を占めて居る大衆の間に消費せらるゝものであるから、之に依つて一般社會の大衆と消費との關係を知ることが出来るので



ある。併しながら生活に必要な資料以外の消費額に關する場合、若しくは富裕階級の消費に關する場合は、さして大なる實益を與ふるものでないのである。處で我國に於ては、此の種の統計は尙ほ甚だ進歩して居ないのであるから、細かい事になると一寸解り兼ねるが、大體に於て一般民衆は其の欲望を満足せしむるに就いて十分なる消費を爲して居らぬと云ふことは勿論である。

元來一國の消費は、過去に於て生産せられた財と、其の年に生産せられた財とを併せて消費することもあるが、併し斯かる消費をしたのでは、恰も個人が其の所得を悉く消費して了つて、更らに在來の財産に手を着けるのと同じ譯で、資本の増加は到底望まれないのである。されば國民經濟に於て資本の増加を計るには、其の消費をして年々の生産以下に在らしめるやうにするのが、甚だ重要な條件である。

今、私經濟の見地から之を觀察すれば、消費は生産を擴張する爲めに新しい資本として差引いた其の残りの所得を消費するやうにせねばならぬのである。それで、此種の消費に關することは家政學に於て研究する所であつて經濟學の論ずべき限りではないが、唯だ此の私經濟的消費に於ても、其の所得が少なれば少ない程、其の多くの部分を生活に必要な資料の消費に充つるものであると云ふことは、茲に注意して置かねばならぬのである。但し私經濟的消費は其の消費せられた財の分量を以て

しては十分に知ることの出来ないものであつて、寧ろ其の財の爲に費された所得の割合に依つて之を知るのが完全な方法であるのである。それで、其の理由は如何といふに、私經濟的消費の中には客觀的の消費以外に、家賃の如き、租税の如き、將た又た教育費の如き、醫師の謝禮の如きものも含むて居て、此等の失費も必ずしも少額でないからである。

勞働者階級が一家を維持するに要する費用の研究は、社會經濟上重要な問題の一であつて、十七世紀に於てベテニーが指を染めた以來幾多の研究を出だし、隨つて今日に於ては之に關する統計も澤山出來て居るが、中に就て亞米利加のライト及びエンゲルの手になつたものは、稍々有名なものであつて、此等の統計に依つて見れば、所得が少なれば少ない程食料品の支出が大なる割合を占めるのである。今左にラスベレンスの統計を掲げやう。

所得	支出				其他
	食物費	被服費	住居費	共	
I 639法	63.4	17.0	7.2	4.3	4.3
II 1101,	58.8	18.1	5.6	4.3	4.3
III 1564,	56.2	15.0	7.9	6.2	6.2
IV 2522,	51.9	14.8	8.4	3.5	3.5

(註) 表中「其他」には燃料の費用、醫師の謝禮、教育費、租税等を含む。  
大都會に於ける食料品に對する失費は、割合上、地方に於けるものよりも重要な關係を有して居ないのである。是れは都會は住宅の費用が遙かに地方に於けるものよりも大であるからである。次にアルコール性飲料に對する失費は、既婚者に在りては總所得の七分乃至九分、未婚者に在りては一分二分に達して居るのである。されば住宅問題や禁酒問題の起るのも無理はないのである。

我國に於てもさうであるが、外國に於ても、曾て法律を以て奢侈其他無用の消費を禁じたことがあつた。それは重商主義の思想か、若しくは社會の階級を明瞭にしようとする考へから來たものであつた。それから後、消費は全く人々の自由で、一時米國は酒の消費を絶対に禁じ、我國其他アヘンを禁じ、其他公衆衛生の立場より消費を制限する場合はあるが、消費は大體に於て自由となつた。酒と云へば、何れの國に於ても、その消費税は甚だ高いが、併し之は消費を制限する目的より來て居るのではなく、全く財政上の目的より出來て居た。然るに現在は戰爭經濟の關係から消費は之れを規正し、消費を全然自由に放任せず、切符制度さへも行はるるに至つた。之れ一は物資の不足を緩和するが爲めであり、二には消費を節約し、貯蓄を奨励するが爲めである。

## 第二章 景氣變動

### 第一節 景氣變動の意義

十八世紀の末から十九世紀にかけて種々の發明が相踵いで現はれ、此の發明が産業上に應用され機械の使用が盛んになり、夥しき固定資本が産業界に使用され労働能率が著しく増加して來て、所謂物質的文明の進歩と云ふものが滔々として底止する所を知らぬ有様となり、産業界の一大變革を見るに至つた。そこで私有財産制度に基く産業界は、長所を有して居ると同時に又た短所をも有して居るから、此の大變革に應ずるのに甚しき困難を感じた。即ち經濟狀態の複雑、信用、投機の弊害等の爲め經濟は時々少なからざる動搖を惹起し、其の結果物價の暴騰となり、暴騰はまた暴落の反動を誘起し、暴落は忽ち産業界の萎靡不振を來たし、信用地に墜ち金融逼迫し、或は會社商店の支拂停止となり、破産となり、或は労働者の失業となり、遂には社會全般に亘り一大不幸を招くに至つた。抑も社會といふものは吾人心意の作用と同じく、決して直線的に進むものではなく、一張すれば一弛し、グルグ

ル迂曲して螺旋狀に進むものであつて、經濟とても之と同じく、順風に帆を揚げた船の如く、眞直には進まぬもので、時に景氣不景氣があつて、經濟にも一弛一弛の動搖を見るは自然の數の免るる能はざる所である。之れが景氣の變動で、その循環である。併しながら、之は止むを得ざるものなりといふもの、此の種の經濟の動搖は、其の影響する所極めて大なるものがあるから、之を放擲して置けば、經濟の進歩發達に測る可らざる大障害を與へるのである。是れ即ち此の種の現象を研究する必要がある所以である。

それで前述の如き經濟界の動搖は其の絶頂が恐慌と稱せられて、それは十九世紀以前に在つても無論これを見たのであるが、其の經濟に甚しき影響を及ぼすに至つたのは、十九世紀の産業發達に伴ひ産業の自由、個人主義の發達、工場制度の創始、外國貿易の擴張並びに信用、投機の盛大を見るに至つた以後のことであるから近代の景氣の循環、其の極點の恐慌は、特に十九世紀以後のものに注意するを要することも考へられるのである。

恐慌は英語の Panic なる語に當り、英語には別に又た Panic なる語があるが、併し此の兩者の間には意義上の差違があるのである。即ち Panic は人心恟々たる狼狽の状態を云ひ、Panic は財界の前途暗澹として信用地に墜ち困難の窮極に達せる有様をいふのである。それで獨逸語、佛蘭西語にもクリ

ースと稱して、英語と殆ど其綴を同じくする語があるが、語の意義は「決定する」若しくは「判斷する」と云ふのであつて、最初は主として醫學上の語として使はれ、病勢が其の極に達し、それよりそれが減退せんとし始めた瞬間の轉期を指したのである。それが後に至り經濟上に轉用せられ經濟の動搖の極に達した時を指していふことになつたのである。

又た恐慌と能く似たもので Depression 即ち商業沈滞若しくは不景氣なる語があつて、千八百六十六年以來英國に於ける不景氣は、多く恐慌の後に起つたものだから、不景氣は必ず恐慌の後に起るものと信ぜられて來た。實は經濟ほどの點から考察を始めてもよいのであるが、景氣が大によりくなり、上景氣となれば終には恐慌となり、其の跡が直ちに景氣の回復とはならず沈滞の情勢が續くのであるから、それを不景氣と考へるので、不景氣も景氣變動の一環をなすものである。

病理學上の語をかりて之を言へば、恐慌は急性、不景氣は慢性の病氣であると考へてよい。經濟の急性的疾患は、經濟のどこかに缺陷があつてそれが急激に經濟を攪亂するとも考へられて來たが、天災地變で起る恐慌にはさやうなこともある。されど多くは恐慌も景氣現象の一特徴であることが多い。勿論産業組織が完備して金融が常に圓滑なる調子を維持することが出来るやうになれば、此の疾病は發生せぬことになるに相違ない。現に今日に於ても、經濟の幼稚な國に於ては恐慌の打撃は依然

として激甚を極めるが、經濟組織の發達して居る國々では、其の影響が漸次緩くなつて行く傾向があり、不景氣に似た現象となるといふことが出来る。しかしそれと同時に最近、國際間の經濟關係が緊密となるに連れ恐慌は單に一國に止まらずして、屢々國際恐慌と云ふ形を取つて廣く國際間に擴がるやうになつた。

それで景氣變動を解して「經濟界が靜穩の状態より漸次好景氣となり、信用の發達、經濟の繁榮、産業の振興及び過度の取引となり、遂に動搖を惹起して壓迫、停滯となりて、困難の狀況に陥り、そして再び靜穩の状態に歸するのを謂ふ」のだとして、さうして其の頂上が恐慌だといふてよいのであるが、さうすると、恐慌とは危惧心の増長により信用地に陥ち、俄かに事業の縮少を促し、債務の取立急にして、一般債務の履行をなす能はざるの状態を謂ふと言へばよい。

## 第二節 恐慌の原因並に學說

次に恐慌は如何なる原因に依つて發生するかといふと、恐慌は經濟界の病氣であつて、人間の病氣にも種々なる原因がある如く、恐慌にも種々なる原因があるのみならず、特に恐慌には一種の心理的作用があるから、此等の關係を明瞭にするのは容易のことではないのである。即ち千八百八十六年米國

に於て恐慌の調査委員が設けられた時に、其の委員の報告した所に依るも、恐慌の原因は、百八十二と云ふ多數に上つて居つたのである。併し之は細別であつて、單に大別するに止めるならば、之を偶發的と自然經濟的との二と爲すことが出来るので、前者は例へば、戰爭、大發明、凶作、其他天災地變、或は大商店の破産の如きものであるが、此等は經濟界の外部より偶然發生するのであるから、之に對して十分經濟學的研究を試むることは出来ないものである。それで其の原因が生産物分配の不公平に在るとか、資本の急激なる増加に在るとか、若しくは、信用、投機の盛んに行はれるに在るとか、人に依つて種々説を異にして居るのであるが、要するに市場生産、大量生産、信用經濟若しくは國際經濟といふが如き現代の經濟組織に基いて大規模の生産をする結果、動もすれば生産過多に陥り、需給の調和を破るから發するのであるとなすものは、其の原因が經濟界の内部に發生すると認めるものである。此等は自然經濟的原因で學問的研究のなし得らるゝもので、又た之を爲す價値のあるものである。それで實際之に關して種々なる學說が起り、或る學者は「生産過多並に之より生ずる恐慌は現今の國民經濟の組織を以てしては必ず經驗しなければならぬのである」と云ふ見地から恐慌を研究したが、彼等は産業と資本の關係に大なる注意を拂ひ、「機械の應用と共に労働者は解雇せられ賃銀は減少するから、資本主義の大規模生産が發達すれば、生産物の増加はあつても、一國人口の大部

分を占むる労働者階級は、却つて其の購買力を減少するから、生産は過多となつて恐慌が起るのである」と言ふて居るのである。

ミルも亦た資本主義の生産に最も注目したのであるが、併し其の説は前に掲げた説とは多少趣を異にして居るのである。即ち「資本が著しく増加すれば、資本より生ずる利益が減少し、其の利益の減少を補はんとする結果、投機を盛んならしめるので、恐慌は之が爲めに起るものである。而して恐慌が起つて資本が減少すれば、一時不景氣となり、資本の増加と共に又た以前と同じ状態に復するのである」と。斯う言ふのである。

惟ふに此の資本主義の生産には慥かに缺點があるのである。即ち元來消費は人の欲望によつて定まるものであつて、其の欲望は消費者の所得如何に依つて極まるものであるのに、資本主義の生産は此等の事情を顧みず唯だ生産そのものみに注意するので、資本主義生産の常として、之に従事するのは、多額の資本を擁し大規模の生産をするから、直ちに生産過多に陥るの結果を見るのである。殊に物價騰貴、事業勃興の際には、生産者が互に競争して生産をするから、一層此の結果に陥り易いのである。尤も競争であるから、之が繼續すれば、弱いものは自然に負けて了つて一般に生産を減少し、また舊時の状態に復する筈であるが、資本主義生産を爲す場合には、競争が不利であつて利益が少な

くなつても、其の事業を中止すれば損失が夥しいから、損失とは知りながらも、矢張り生産を繼續するので、随つて生産を減少せしむる度合が甚だ遅緩であるのである。而して又た斯かる場合には、或る者が生産を制限しても、他の者が依然生産を繼續して居れば、生産過多の結果は矢張り免るゝことが出来ないもので、今日の如く經濟的領域が一地方、一國內に止らずして、廣く國際間に擴張せられつつあるときに於ては、個人の力を以て需給の平均を計ることは到底不可能である。

それで景氣變動は、現今の如き富を以て人の價値を定める社會並に統一なき産業機構に於ては、到底免る可らざるものであつて、唯だ其の度合を少なくし、其の強さを緩める爲めに努力する外ないのである。茲に於て論者は「労働者の受取る割合が少く恐慌が起るのであるから労働者の賃銀を高めよ」と言ふけれ共、斯くしたとて恐慌は無くなるとは謂へないのであつて、労働者の賃銀が多くなつて、其の需要が種々なる財に對して増加しても、今度は資本主の需要は少なくなるから、生産消費の關係は動亂しないとは謂ひ難く、需要と供給との不一致即ち生産過多は矢張り起るのである。

### 第三節 景氣循環説

そこで、景氣循環説といふものがある。即ち既に擧げた學説たる、「資本が多くなつて利益が少なく

なるので無謀な事業を起し、信用を濫用して恐慌が起り、それから又資本を破壊して不景氣となり、資本が少なくなるから利益が多くなり、更らに資本が増へて利益が少なくなるといふやうに、同一事を繰返す」と言へば明らかに景氣循環説である。之れ既に述べたるが如く、經濟社會の進歩も直線的ではなく、螺旋狀の徑路を取るものであるから、歴史は歴史を繰返すと同じ意味で、景氣の循環を見るのは寧ろ當然のことであると謂はねばならぬのである。

然るに英國では嘗て循環の週期を明白に何年毎に來ると言ひ、それを十年と云はれた。是が又た不思議にも英國では事實上、十年毎に一回の恐慌に出逢つたのであるから、ジェボンヌは之を解し、其の原因を太陽の黒點に歸したのである。即ちジェボンヌの説く所に依れば太陽の黒點は十年毎に最も甚だしくなるものであつて、元來太陽に黒點が出るといふのは、太陽が熱の放射を減ずることを意味し、熱の放射にして減ずれば地球表面の溫度を低下し、雨や雪を多からしめるもので、雨や雪が多くなれば五穀も實らずして茲に凶作を見るから、其の結果農作物の價格が騰貴し、そしてそれが四季の支拂日になると、終に恐慌となるのであると謂ふのである。併し此の説は誤つて居つて、第一黒點が十年毎に出るといふことは、天文學上何等の憑據もあるのではなく、また地球の表面といへば、英國一箇國に限られた話でもなく、雨や雪の多い爲めに英國が凶作であるにしても、世界中盡く凶作であ

ると云ふことは斷言しがたいのである。また事實に於ても、恐慌が正確に十年毎に繰返さるゝものでも何でもないのである。それよりも經濟の機構の上から景氣は循環すといふのが正しき認識である。

#### 第四節 恐慌の救済

最後に恐慌が起つたらどうすればよいかと言へば、直接に最も有效なる方法はと云へば、利子の引上である。利子の引上は中央銀行が先づ爲すべきものであつて、是は一般經濟會に警告を與へる爲めである。殊に國際金融の疏通のある處では正貨が海外に流出する場合の如き、利子の引上に依つて海外の正貨を吸収し、金融を緩和せしむることも出来るのである。但し利子の引上はしても、中央銀行が貸出を減るが如きことがあれば、恐慌を益々甚だしからしむるから、利子の引上と同時に自由に大膽に貸出を爲すことは、中央銀行の職能として大切なことである。恐慌救済の直接の方法は先づ以上の如きものであるが、間接の方法即ち豫防策としては、貨幣、銀行の制度を完備せしむるが如き、統計を作製するが如き、輿信所の制度を發達せしめ、信用を重んじ、會社法、破産法等を完全にすることが如き、海外市場の状況を迅速に而かも正確に知らしむるが爲め、經濟事情に精通せる商務官を海外に駐在せしむるが如き、何れも有效なるものである。さうして其の根本は經濟全體の機構に注意しなげ

ればならぬのである。殊に資本主義の生産が盛んになつて經濟に動搖が起るのには、經濟機構に統一が缺けて居ることにも因るのであるから、生産に従事して居るものが競争を避け、需要に適應するやうに供給を調和することが極めて大切である。此の目的を達するには生産組合の組織、企業の合同等生産の調整が直接間接に有效である。但し生産組合は性質上、其の規模の大を致すことが出来ぬから、其の效力も亦自ら限りがあるに引換へ、企業の合同は之に依つて一大企業が起り、製造販賣を一手に收むることが出来るのであるから、需給の調和を計るに最も有效であるが、しかし大企業は所謂トラスト、カルテルの如きものであつて、往々にして消費者の利害を顧みず、過當の利益を收めんとするのであるから、之が實施に關しては十分の監督を必要とするのである。若し之を怠れば、所謂、前門虎を防いで後門狼を入れる結果になる。景氣變動と産業的機構并に之れが救済策は極めて興味ある問題で、結局は經濟機構の根本に觸れる問題であるから之れが研究は尙ほ別に繼續することとする。

經濟學原理終

昭和十五年六月二十日印刷  
昭和十五年六月二十五日發行

(經濟學原理)  
定價金參圓貳拾錢也

著者所有

著者	服部文四郎
發行者	東京市本郷區元町一丁目十五 中園 怡
印刷者	東京市神田區小川町一丁目十一 綾部喜久二
印刷所	東京市神田區小川町一丁目十一 宮本印刷所

發行所

東京市本郷區元町一ノ一五  
振替東京六六三一二番  
電話小石川(85)一四一〇番

明善社

